

Title	赤木攻名誉教授に聞く : 大阪外国語大学の思い出
Author(s)	管, 真城; 進藤, 修一
Citation	
Issue Date	2014-02-28
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/26976
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

名誉教授インタビュー

赤木攻名誉教授に聞く

— 大阪外国語大学の思い出 —

菅 真城・進藤修一

Masaki KAN / Shuichi SHINDO

2013年3月22日

於 大阪大学アーカイブズ室長室（大阪府箕面市）

大阪大学外国語学部

赤木攻名誉教授に聞く —大阪外国語大学の思い出—

菅 真城・進藤修一

Masaki KAN/Shuichi SHINDO

解説

大阪大学では、2006（平成18）年から名誉教授の方々に大阪大学の歴史に関する事柄についてインタビューし、その模様をビデオに収録して後世に残す事業を実施してきた。2006年7月に大阪大学文書館設置準備室が設置されると、2007年度からはこれを文書館設置準備室の事業として実施してきた。文書館設置準備室は2012年10月1日付で大阪大学アーカイブズに改組されたが、大阪大学アーカイブズ設置後も名誉教授へのインタビュー事業は継続している。

大阪大学と大阪外国語大学とは2007年10月1日に統合されたが、大阪外国語大学のあゆみも大阪大学の歴史の貴重な一齣である。これまで大阪外国語大学名誉教授へのインタビューは、是永駿、中岡省治、池田修の各名誉教授に対して行ってきた（巻末の「大阪外国語大学名誉教授へのインタビュー実施録」参照）。本書に収録した赤木攻名誉教授へのインタビューはこれに続くものである。赤木名誉教授へのインタビューは、2013年3月22日に大阪大学アーカイブズ室長室（大阪府箕面市）において実施した。インタビュアーは、菅真城大阪大学アーカイブズ准教授と進藤修一大阪大学大学院言語文化研究科准教授が務めた。

赤木名誉教授は、タイ学研究の第一人者である一方、学内においては学生部長、学長などの重職を務められた。その略歴については、本文末尾をご参照いただきたい。本インタビューでは、赤木名誉教授の経歴に従って、大阪外国語大学について語っていただいている。その内容は多岐にわたるが、「言語」という大阪外国語大学が対象とする学問の研究・教育にどう対処するかという視点が一貫している。大学紛争を経て、上八から箕面へ移転した時期は、当時の赤木名誉教授をはじめとする若手教員たちが「文化」や「地域」という「言語」の新しい学問・研究に乗り出した時期と符合する。そしてこれらは、国際文化学科と地域文化学科の2学科への学部改組（1993年）、区分制大学院言語社会研究科博士課程の設置（1997年）へ

とつながる。「言語」を教育研究することとは何かという赤木名誉教授の問いは、現在においてもなお大きな意味を持ち、今後の大阪大学の進むべき方向に貴重な示唆を与えてくれている。

なお、大阪外国語大学 70 年史編集委員会編『大阪外国語大学 70 年史』（大阪外国語大学 70 年史刊行会、1992 年）の第 1 編第 5 章「大阪外国語大学の新たなる発展を目指して」は赤木名誉教授の執筆になる。本書とあわせてご参照いただきたい。

赤木攻名誉教授に聞く —大阪外国語大学の思い出—

菅 真城・進藤修一

2013年3月22日

於 大阪大学アーカイブズ室長室（大阪府箕面市）

久しぶりの箕面キャンパス

進藤 本日は、遠いところをありがとうございました。

赤木 どういたしまして。彩都西駅ですか、あの駅で降りて歩いて箕面キャンパスに来たのは初めてですね。駅を降り歩きながら、彩都の開発計画が始まったころ、あの裏山へ何回か登って、展望したことを思い出しました。その時は、結構晴れた日には、梅田はもちろんのこと、遠くは関空（関西国際空港）、淡路辺りまで見えましたね。今はどうなのでしょうか。

進藤 先生、その裏山もなくなりました。全部削られてしまいました。

赤木 裏山がなくなり、開発され、キャンパスとの間に橋ができたんですね。

進藤 ええ、そうなんです。裏山はすっかりなくなってしまって、当時とはすっかり様子が変わってしまいました。

赤木 キャンパスの北側を出たら、あちらは民有地ですか。

進藤 そうなんです。UR（独立行政法人都市再生機構）の所有地です。それで、大学側の斜面をURと交換しまして、向こうの工事の残土で埋め立ててもらって、そこを今は駐輪場にしています。

赤木 そうですか。いや、久しぶりに来まして、周囲の変容に驚いています。ただ、キャンパスそのものは私の在任中とあまり変わっていませんね。建物関係だったら、その生協（箕面福利会館）は、たしか、拡充したはずですね。

進藤 そうですね、たしか、先生が学長のころに拡張しましたね。

赤木 その拡充と大学院棟の建設、それが私の最後の仕事だったなと思って。文部省から特別に予算をもらったのを思い出しました。さっき、ぶらっとその辺を見てきたけど、あまり変わってないですね。あれ以来は、新しいものはそうできていない気がします。でも、あらためて歩いてみると、本当にこじんまりして、いいキャンパスだなと思いましたけどね。思い出のある中庭の世界時計もそのままだし、雰囲気も変わってないし。B棟なんか、1階とか2階とかが、ちょっときれいになっているかなと思って見たのですが。

進藤 そうですね。

赤木 それはそれとして、本当に久しぶりの「外大」です。

進藤 本当にごぶさたしております。

赤木 今日は、お招きいただきありがとうございます。

進藤 私も赤木先生をお迎えするというこで、いろいろ考えをめぐらせていたのですが、大阪大学はタイに研究教育センターを持っておりますし、先生にも何度かご足労いただいたことが、あったのではないかと・・・。

赤木 そうですね。たしか、当時はセンター長が関（達治）さんだったかな。

進藤 今も関センター長です。

赤木 長いですね。関さんとは、タイで何回もお会いしています。

進藤 そうでしたか。タイという国自体も大阪大学にとって非常に重要な国ですし、タイの話題がニュースに出るたびに、ご出演されていた赤木先生のご尊顔をテレビで拝見しておりました。

赤木 今、阪大の海外拠点はタイと、ヨーロッパはどこでしたかね。

進藤 オランダです。

赤木 オランダですね。他にはどこにありますか。

進藤 アメリカと、それと中国にあります。

赤木 中国はどこに。

進藤 上海に。現在は、元外大の古川（裕）先生がセンター長なんです。

ところで、阪大から文系の学生を中心にマヒドン大学へ夏期研修で派遣しているということもありまして、タイは阪大にとってアジアの中でも非常に重要な国ですが、先生はそこに関係されているので、いろいろとお話を伺えると思いました。

赤木 たしか、ずっと以前から、今でもあるのかな、阪大に微生物病研究所というところがあって、先生方が東南アジアによく出かけておられました。東南アジアは、気候や風土の関係で、微生物の細菌などの研究に非常によかったのでしょうか。私もそのころお手伝いをしたことがあります。いずれにしても、東南アジアは、学術も含めてバンコクを中心に動いているところがありますからね。

進藤 なるほど。それで先ほど、研究室の机の引き出しをいろいろ探してありましたら、懐かしい写真が出てまいりました。

赤木 ああ、タイから勲章をもらった時のものですね（1996年）。

進藤 ええ。

赤木 彼女は何をもらわれたのかな。

進藤 小野（清美）先生。和辻哲郎文化賞でした。

赤木 ああ。

進藤 それで、おめでたいこと続きなのでお二人の祝賀会をしようということになって、記念会館の2階で開催した時の写真ですね。

赤木 （写真を眺めながら）この時は、芦田さんは、まだお元気だったんだな。

進藤 そうですね。その後、しばらくして休職されて、最終的にはそのままお亡くなりになりました。

赤木 ああ、なんかそのようにうかがっています。これは、どなただったかな。

進藤 友田先生。

赤木 お元気かな。

進藤 友田先生も停年退職前にご病気になられ、ご退職されました。

赤木 病気だとは聞いていましたが・・・。

進藤 1年だけ復帰されて授業をされたのですが、ちょっとしんどかったようです。

赤木 そうですか。ほんと、外大がここ箕面へ移った当時は、現役の先生が2人ぐらい亡くなられたのかな。

進藤 そうですか。

赤木 新キャンパスへの移転直後の大学では、どこの大学も、同じような状況があったようですね。広島大だって新キャンパスに移った時、何人が亡くなったのではないかな。

菅 ああ、そうですね。

赤木 筑波大しかり。やはり通勤とか環境が大きく変わるからでしょうね。

懐かしい写真をありがとうございます。

進藤 いえ、どういたしまして。

赤木 それにしても、ずいぶん昔のことですね。

進藤 もうだいぶ前ですね。もう十数年前。

赤木 もう十年以上前ですか。

進藤 ええ、そうですね。

赤木 タイからの勲章、いつもらったか忘れてしまいました。

進藤 平成8（1996）年ですね。

赤木 勲章そのものもどこに置いたか忘れてましたが、タイに行くとき、勲章その

ものではなくて、徽章というのかな、それを重宝することがありますね。ちょっとしたパーティーなどがある時につけておくと、まあまあ少しは、日本よりは向こうの方が、こういうのを持ち上げるところがありますからね。

進藤 私が記憶しているのは、確かこの時に白い象の置物か何か、副賞みたいな形でいただいておられたということですが。

赤木 いただいたかもしれませんね。

進藤 ええ。それで、会場に先生が持ってきてくださって拝見した記憶があるんですよ。

赤木 白象勲章（タイ王国白象勲章第三等級章）というんですよ。日本の勲三等相当だったかな。

進藤 なるほど。それが物語るように、先生は大阪大学にとって重要な国のエキスパートということで、今日はいろいろとお話を伺いたいと思っております。

赤木 何をおっしゃいますか。ありがとうございます。

進藤 それでは、これからは引き続き、こちらで準備させていただいた質問に従って進めたいと思います。

大阪外国語大学に入学

菅 それでは、まず先生の学生時代の話から始めさせていただきたいと思いますが。

赤木 私も少しメモしたんだけど、何年入学だったかな。

菅 先生が、ご入学になったのが昭和 38（1963）年で、ご卒業が昭和 42（1967）年 3 月ということでございます。

赤木 そうでしたね。じつは、私は出身が岡山県なんですよ。しかも、岡山でも、ずいぶん田舎で。JR の伯備線とか芸備線をご存知ですか。

菅 はい。

赤木 伯備線と芸備線、それに姫新線が交わったところがありますが、そこが新見で、その出身なんです。しかも、生家は新見の市街地から遠く離れた山の中の寒村で、外国とか、そういうのは縁遠いところですね。空を見上げたら山ばかりで、このぐらいしか空が見えない所で生まれました。

しかも、小学校は山の上であり片道約 1 時間。坂道を徒歩で通いました。学校は、生徒数が少ないため、複式教育。1 人の先生が同時に 2 学年を一緒に教えるというやり方ですね。本当の日本の「ど田舎」ですね。だから、中学校へ行った

時にも、英語の授業なんていうのは、父兄の半分以上の人が、うちの子には必要ないと言ってましたよ。将来英語を使うようなことはめったにないからという理由でしょうね。そんな田舎で生まれたから、大阪に来た時には、なにもかもびっくりでしたね。それまで、あまり都市というものを経験していなかったから。

ご存じかどうか知りませんが、汚い上八学舎（大阪市天王寺区）—これは皆さん認めているけど—で学び始めました。でも、私にとっては、電車とか百貨店とか、パチンコ屋さんとか、上六界限に慣れるのが、大変でした。最初はちょっと、ショックでもないけど、ここが日本の進んだ所、都会だと自分に言い聞かせました。

一番最初は、上本町のちょうど電車が突き当たって右へ曲がる（天王寺警察のほうへ曲がる）ところを逆に左へ折れた所。あそこは四天王寺の東門になるのかな、東門町といったと思いますが、そこに下宿をしました。それは、電車は乗ったらどこへ行くか分からないし、乗り物にもまともによろ乗らないわけで、とにかく歩ける範囲でと思って。

そこだったら、5、6分か10分以内で大学へ行けますから。とにかく、最初そこへ下宿しました。そうしたら、2階に二つ襖で仕切られた部屋があって、その一つが私の部屋でした。隣の部屋には、モンゴル語の長崎県出身の先輩がいました。その方はいい人で、近所にどんな食べ物があるかなどいろいろなことを教えてくれましたね。今日はいいことがあったから、ちょっといいものを食べに行こうかなと、一緒に出かけました。いいものといっても、焼き飯ぐらいだったけどね。

一同 ははは（笑）。

赤木 とにかく質素な生活でしたが、その下宿でその先輩から非常によくしていただいたので、何とかスタートできました。ただ、最初のひと月ぐらいは下宿と大学の往復ばかりでした。

当時、私が入った時、タイ語が何人だったかな、12、3人ではなかったかなと思いますね。みんな秀才に見えるわけですよ。高津高校（大阪府立高津高等学校）とか、天王寺高校（大阪府立天王寺高等学校）とかの出身者がいましたからね。私は田舎の人間ですからね。あ、私は高等学校だけは新見ではなく隣の市の高梁高校（岡山県立高梁高等学校）なんです。ちょっと読みにくい漢字ですが、「たかはし（高梁）」です。とにかく、最初は、ほんまに小さくなって静かにしていましたよ。

それで、一番最初か2回目の授業の時にテキストを渡されて、戸惑いましたね。私がなぜタイ語を選択したかということですが、あまりきちんとした理由がないんです。とにかく一人で遠くに受験に行くのが不安だったので、親戚のあるところを探したのです。たまたま祖父の弟が大阪にいて、「わしが連れていったる」と言うから、ああそれなら受験しようといった調子でした。

それで、当時は一期校、二期校に分かれていて、二期校の文系はほとんどなかった。私は、父が岡山で教員をやっていたから広島大（教育学部）を受けたらどうだと言われたんだけど、当時の私は親のやっている職業は嫌だと思っていましたから。

それで、たまたま二期校の外大を受けたんですが、通ると思っていなかったし、合格通知が来たのは3月末ぎりぎりぐらい。まあ、夏ぐらいまで行けばいいなと思って、とにかく、大阪の親戚の方も「大阪には春場所もあるし、来いや」と（笑）。
一同 ははは（笑）。

赤木 それで来て、さっき話したように、歩いていけるところに下宿を探してもらって。

ただ、教室に入ると、みんな秀才に見えますし、これはえらいところへ来たなと。そして、何回目かの授業の時に、タイ語の教科書を見せてもらって、これはあかんと思った。もう、こんな言葉（言語）は人間が勉強するものじゃないと。もう止めやと思って、富田（竹二郎）先生に「私には、これはできないと思います」と言ったんですが、先生は「まあ夏休みぐらいまでやってみて、あかんかったら、その時考えたらええんちゃうか」という話だったから、ああ、それならと。しようがないということで。

それで何回か授業を受けて、ひと月、ふた月と経つにつれて、今でもそうかもしれないませんが、当時は小テストみたいな簡単なテストが頻繁にありまして、その結果を見たら、その秀才だと思っていた都会出身のやつも、私と同じか下ぐらい。これはいけると思って（笑）。それで、やっと勉強するつもりになりました。

申し上げるのを忘れていましたが、高等学校の時に、二期校で外大を決めたんだけど、どの専攻語にするかは決めていなかった。それで、私の中には、これはちょっと理由は分からないのですが、ヨーロッパの言語はあんまりというのがあったんです。当時は、先進国にあんまりいい感じを持っていなかったのかもしれませんが。それでアジアの言語にしようというのはありました。

当時、アジアは朝鮮語から始まったかな。それで、いくつか並べて自分でくじ

引きをしたらタイだったと。

一同 ははは（笑）。

赤木 タイ語に決めたのは、それだけのこと。それで、タイがどこにあるぐらいは分かったけど、ほとんどもう無知でしたね。うちの母も、「どこや、なんや」など言っていましたけどね。とにかく田舎だし。だから、息子がどこの大学で何を勉強しているのかを近所の人に聞かれたら、母や父は説明には困ったかもしれませんね。当時は、まだまだ一般にアジアに関心はありませんでしたから。後でもお話ししますが、アジアと日本の関係が、こんなに発展する時代が来るとは誰も思っていなかったし。ともかく、入学のいきさつはそんな簡単なことです。加えて、どこでもいいわと思って入った途端に難しそうな言語に出くわしたから、ちょっと困ったなと思いました。でも、まあだんだん慣れてきて。

それで、学生時代で一番大きかったのはタイ人の友人ができたことです。今は東大阪市かな、布施の向こうの辺りに、タイの人が1人住んでおられて、技術研修で町工場へ旋盤か何かを習いに来られていたのです。タイから来たばかりで、日本語がもう一つ分からない。私は、そちらの近くに親しい友達がいてよく行っていたので、そんな珍しい人が近所に居るらしいと聞いて、会ってみたのですよ。そしたら、その人と仲良くなりまして。

私もタイ語を習いかけていたけれども、あまりできなかったし、彼は日本語があまりできない。だから、週末ぐらいによく会い、互いに教え合ったのです。今でも彼とは連絡を取り合っていますが、その方と頻繁に会うようになって、ああ、タイ語は面白いと感じるようになりました。また、世界にはいろいろなところがあるんだなということもわかり、ちょっと頑張ろうかなと思った。タイ語の習い始めは、そんなところでしたね。

菅 先生が、学生時代のタイ語の先生というどなたになるのでしょうか。

赤木 やはり、富田（竹二郎）先生ですね。最初は富田先生しかいらっしやらなかった。それで、吉川（利治）先生が、私が2年か3年の時に、タイへの留学から帰ってこられて、教壇に立たれました。それと外国人教師としては、コーサ・アリア先生ですね。先生は阪大（大阪大学工学部）へ留学していて、そのまま外大の先生になった方でした。その当時ネイティブから習うことができたのですから、やはり外大でしたね。

ただ、2年生か3年生になるぐらいに、外から教えに来られている数名の先生（講師）にも、教えてもらいました。南方仏教とかタイ農村社会とかタイ史を学

びました。その件では、富田先生は偉いなと思います。そのころ、ちょうど私が入ったころぐらいから、外大でも言語だけを教えては駄目だという考えが少しあったのですが、富田先生は非常に早くからその考えを持っておられたわけです。いわゆる、ある一定の地域をトータルにとらえる「地域研究」という考えですね。富田先生と中国語の伊地智（善継）先生がお友達で（富田先生は中国語の出身でもある）、よくそうした話をしておられました。

それで、当時、アメリカからもたらされた「地域研究」という概念が、日本でもあちこちで言われ始めていました。外大でもそういうのがいるのではないかとということで、南方仏教学の佐々木（教悟）先生、タイの歴史の石井（米雄）先生とか、タイ農村社会学の水野（浩一）先生とか、そういう先生方を富田先生が非常勤として呼ばれたのです。それが、タイを学ぶのに結構大きく役に立ちましたね。3年生ぐらいから、タイ語以外の授業も多く、楽しかったですね。

そして、私が3年の時か4年の時に、いろいろな事情があり早く亡くなられたのですが、たぶんご存じの方も多いと思いますが、東南アジア研究を日本で最初に本格的に確立したと言われている矢野（暢）先生が外大（タイ語学科）へ赴任されたんです。その先生から1年間か2年間、主としてタイの政治を学びました。やはり、タイに関するいろいろな分野の先生の講義を聴くことによって、視野がうんと広がりましたね。今から考えれば、戦後の日本のアジア研究のあけぼのといった時代ではなかったかと思えますね。

ところで、今との一番の違いは、当時はやはり当該国や現地に行けないことでした。外国へ出かけるには莫大な費用が必要で、全然お金がない学生の身分では仕方なかったわけです。

そういう外部からの先生方がおられたことに加えて、富田先生のもう一つの考え方に現地主義がありました。やはり、自分でフィールド（現地）へ出ないと駄目だという考えを持っておられたので、留学や調査でフィールドへ出ることを積極的に勧められたのです。先生自身も、機会があればタイへ出かけておられました。私が学生時代にも2年間ばかり、タイの大学へ講義に行かれてたはずですよ。

タイへ留学

菅 今、学生時代にはなかなか外に出られないというお話だったのですが、先生は外大をご卒業になると、チュラーロンコーン大学 (Chulalongkorn University) にご留学なされていますね。

赤木　そうです。結局、先に申したように、ほとんど毎週ぐらい会うタイ人の友人ができたことが、留学を決心するのに大きかったですね。

そして、先ほど言ったように、親が教員だったから、教員はあかん、なりたくないと思っていたんですね。それに、ちょうど私たちの時代は、一般的に商社への就職を憧れていた時代でしたかね。そのことに関して、おもしろい話があります。何年生だったか忘れたけど、通訳のバイトをしたことがあるんです。当時、タイ語の通訳なんて、そんなにありませんでしたがね。級友が皆尻込みする中で、タイ人の友人と会っていた私は、何とかできるだろうと通訳のバイトを受けてしまったのです。

いまだに覚えているんですが、10日間ぐらい通訳に行ったのかな。ある日本の会社とタイの会社が大きな契約をするということで、タイからお父さん（社長）と息子が来ていて、お父さんは英語もできましたが、タイ語しかわからない息子の世話をしてくれとのことでした。どこかあちこちへ連れていってくれということで、奈良とか京都へも連れていったりしたんです。それで終わったら、契約がうまくいったのかな。当時で6万円か7万円もらったんです。世の中にはこんないいことがあるのかなとびっくりしました。大金をどうしたかですが、半分はニココンか何かのカメラを買って、あとは貯金をしました。

その時通訳に行った会社はたぶん三井物産ではなかったかと思うのですが、会社の担当者と打ち合わせをした際に、一つの広いフロアで大勢の社員が並んだ机に向かって仕事をしている風景を目にしました。みんな、わあわあやっている。その時、その担当の人が「ちょっと、赤木さん、待っというて」と言って、両手両耳で2つの受話器を駆使し電話し始めたのです。私は、これが憧れの花の商社の実態かと少しショックでした。私は一生こんな電話かけるばかりの仕事は嫌だなあと思い始め、そのころから少しずつ、すぐに就職するのはやめておいたほうがいいかなと考えたのです。私は現役入学でしたから、1年ぐらいは就職浪人してもいいという気があったのも事実です。

それで、その頃、小田実の『何でも見てやろう』（河出書房新社、1965年）とか、アメリカへ行って帰った来た体験本などを目にするにつけ、やはり現地を見ないとあかんと考え始めました。いくらタイ語やタイに関する知識を身につけても、フィールドというか、生のもの（現地）を見たほうがいいと思い、どうしてもタイへ行きたいなと思ったんです。

それで、たまたま富田先生が、私が4年生の時にタイへおられたんだと思うん

ですね。それで私は先生に紹介してもらって、チュラーロンコーン大学文学部の学部長の名前を教えてもらって、手紙を書いたのです。タイ語で書いたんですよ。私にとっては一世一代の作文です。とにかく行きたいから受け入れてくれと。返事は来ないと思っていたら、いつでも来いという返事が来た。

それからが大変だったんです。岡山の田舎は、一族郎党みんな反対です。特に、うちの高齢の母方の祖父などは、第二次大戦とベトナム戦争がこんがらがって頭にあるのか、息子をそんな戦地に送るんじゃないと、言っていたそうです。それから、ヘビやワニがいるような所へ何で可愛い息子を行かせるのか、などとか。最初に話したような田舎だからですね。まあ親は認めてくれ、少しお金をもらって行くことにはなりましたが、村での壮行会は水杯の何というのか、お別れ会みたいなものでしたね（笑）。

菅 もう本当の壮行会ですね。

赤木 本当に（笑）。今でも覚えています。伊丹の大阪空港から出発したんだけど、当時、飛行機の飛行距離が短いから、台湾と香港とかに立ち寄って給油をして飛ぶわけ。おまけに、予約したタイ航空は、ちょうど出発日の1週間ぐらい前に、香港の啓徳という飛行場だったかでオーバーランして海の中へ落ちたんです。旅行会社から「予定通り乗りますか」との問い合わせの電話がありました。そんなことを言われても、私は乗らざるを得ないじゃないですか。当時は学割があって安いチケットだったと思うんだけど、親からいただいた大切なお金で買ったのですから。

それで乗ったんだけど、その出発日に台風が来たこともあり、お客さんが異常に少なかったのを覚えています。そして最初の給油地であった台湾に降りて再度飛び立つときに、スチュワーデスが、あなたはこっちに来いといって、ファーストクラスへ座らせてくれたんです。面白い人だ、若いのにタイ語がちょっとできると。それで、私は可愛らしい女性たちと会話を楽しんでいる間にバンコクに着いた。最初のタイ行のフライトは、そんな感じでした。

だから、とにかく行こうと頑張ったわけです。その時は富田先生がバンコクにまだおられたので、先生がいる限り大丈夫だと。2年目からはタイ政府の奨学金を少しもらいました。2年間のタイでの大学生生活、それが私の原点になります。やはり見ると聞くではずいぶん違う。留学時には、ほとんど全県を旅して回ったし、友達もたくさんできました。今考えれば、あの時少し無理をしてタイへ出かけたのが、良かったのかもしれないですね。

でも、今とは違って、日本とのやり取りがほとんどできない。手紙を書いても着いているか着いていないか分からないし、国際電話といえば、料金が高い上に、電話局へ行って、申し込んで、1時間ぐらい待って、「空きましたから、ブースへどうぞ」と言われて入ったら、雑音がひどくて「ウーンウーン、元気？」「うん、元気、ワーガーワー」で終わりです。(笑)。もちろん私の田舎でも、村に1軒ぐらいしか電話がない時代だったから、そんなものでした。

それで2年間滞在、でも満喫したというか、楽しかったですね。学生寮にも入ったりして。その時の原体験が非常に大きいと思います。だから、外国語をやる時には、やはりフィールドへ出ないと駄目だというのは、その時に強く思いました。

それで、運がいいことに、外大で教官ポストが1つ空いたんですよ。たぶん、矢野先生が辞めたのかな、それで私にどうかなという話が来たわけです。そのころ外大はもっと貧乏で、ポストはほとんどなかったですからね。

大学紛争の思い出

菅 それで、昭和 44 (1969) 年 4 月に大阪外国語大学に助手として就職され、その後、昭和 48 (1973) 年に講師、昭和 53 (1978) 年 1 月に助教授、昭和 63 (1988) 年 1 月に教授ということで、外大の教員としてお勤めになったわけですが、この間のことで言いますと、まず大学紛争とか移転とか、いろいろあったかと思うのですけれども、いかがでしょうか。

赤木 ああ、いろいろありました。ちょうど私が勤め始めた時は大学紛争中でした。それで上八の校舎はブロックされ、研究室にも入れなかったですね。会議なども、学外で行われていました。当時何をやらされたかという、私は若かったこともあり、夜間の番兵、見回り役みたいなことが多かったですね。

進藤さんをご存じかな。上八学舎には、運動場みたいなのが南側に少しあって、その向こうに部室みたいな建物があって、そこら辺によく学生がたむろしていましたから、夜見回りをしたのです。当時は、学内を歩いていても、鳥が飛んでくるのを、石と錯覚するような変な時代でした。とにかく、身が危ない時代でした。たぶん、確かではありませんが、教官就任のあいさつは、学外での教授会だったような気がします。

就任したころは、まさに紛争の最中でした。それで授業は、私はそんなに多く担当していなかったけど、やはり外でやらざるを得なかったですね。公民館やお

寺を借りたりして。そんな時代でしたね。

ただ、幸いかどうか、タイ語学科そのものの中には、他の語学科と異なり闘争委員会とかいったグループがなかったので、教学面ではそれほど大きなダメージはありませんでした。当時、学外で授業をした学生さんで、今、時々会うと、非常に懐かしいという話が出てきますね。

ただ、私自身には、これから先大学はどうなるのかなという心配や不安がありました。ちょうど紛争の始まるのころは、まだタイにいたこともあり、あまり紛争の流れがよく分かっていなかったせいもあります。でも、市大（大阪市立大学）とか、府大（大阪府立大学）でしたかね。そうした大学から「外人部隊」が来ると多く負傷者が出ていました。それと、私のもっと年上の先生などは、団体交渉などの対応に大変苦勞されたと思います。私は一番若かったから、そんなに表に出ることもありませんでしたから。

しかし、やはり大変でしたね。当時は個人研究室ではなかったのですが、やはり研究室が占拠封鎖されて、中のものが盗まれました。何が盗まれたかはちょっと忘れましたが。

進藤 紛争時代の授業の話をつい先生から伺うと、大変だったというイメージを受けます。でも結局学生さんは、大学外で授業をやる時には、真面目に来ていたというお話ですが。

赤木 ええ。真面目に来ていました。しかも一生懸命にやっていた学生が多かった。なぜ、お寺や先生の自宅で授業をすると、あれだけのエネルギーが出たのか、考えてみる必要がありますね。「教育」とは何かという問題が、潜んでいるように思います。

私はフルに紛争を経験していないからよく分からないけど、いまだに、紛争が何だったかなと時々思うことがあります。やはり、とりわけ外大にとって紛争を問い直してみる必要があるでしょうね。

ところで、『70年史（大阪外国語大学70年史）』（大阪外国語大学70年史刊行会、1992年）の本を知っておられますか。

菅 はい。

赤木 あの『70年史』の第1編通史の第5章、一番最後の章でしたかね。たしか、その第5章のタイトルは「大阪外国語大学の新たなる発展を目指して」だったと思うのですが、私が執筆しました。第5章以前は、全部プロの元新聞記者の人が書かれたんですが、第5章だけは、編集委員の一人であった私が担当したの

です。未来を見据えた章を設ける必要があると私が意見したものですから、それならあなたが書きなさいということになってしまっただけです。

その昔、『外大新聞』というのがあったんですよ、今の新聞ではなくてね。その章の執筆時に、あらためて『外大新聞』を読み直したりしていたら、やはり外大でも過去において何回か、学生がいろいろな形で強く大きく発言した時期があるんですね。それを調べてみると、結局、基本的には言語の問題ですね。つまり、言語を学ぶことはどういうことかという問いかけが外大生にとって常に存在しているわけです。

しかも、ドイツ語が専門の進藤先生はどうか知りませんが、タイ語なんていうのは、まったくの初歩から学習するわけで、声調をマスターするにはカラスの鳴き声からしないといけないわけです。「カー・カー・カー・カー・カー」と。18歳にも19歳にもなって、なぜこんなことをしなければいけないのかと、だいたいの方が考えるのね。言語を学ぶことは、なぜそんなことをしなければならないのか。大学とは学問をやる場所ではないのか、真理を学ぶ場所ではないのか。だれもが、疑問を抱き悩むわけですね。そうした言語を学ぶ基本的な問題が底流にあり、言語を一生懸命にやれといっても、いったい何のためか、言語だけを学べばいいのかといった疑問が噴出し、外大のカリキュラムなどへの批判が出てきた時代が、紛争前にも何度かありました。外大という大学にくっついて離れない問題が、もっとも大きく燃え上がったのが「外大紛争」だったと、私は思っています。

あの第5章を読んでいただくと、そうした考えを理解してもらえそうです。特に、漢字で書くと難しいのですが、「鶴（ぬえ）」という言葉があるでしょう。「よく分からない」、「正体不明」といった意味ですが、まさに言語は鶴的存在であると、そこで述べているはずですね。外大生にとって、ものすごく「鶴」的存在である言語を何のために勉強するのかというのは、究極の問題なのです。

しかし、その解決の糸口が見えないまま学習を続けると、若い人だとどうしても不満が蓄積し、感情として爆発するわけです。全国的な大学紛争ではたしか矛盾が最も蓄積していた医学部から火の手が上がったと覚えています、外大に移った火は外大のそうした固有の慢性的問題を浮き上がらせたのだと思います。

だから言語というのは、いずれも外大にとってのある種、切っても切れないものです。どうわめいても、やはり外大にとっては言語が一番大切なわけですから、どういうふうにつき合うかという問題を真剣に考えなければなりません。だが、

教員レベルでも、なかなか納得いく解答は見いだせない。ましてや、学生レベルでは納得しないところがいっぱいあったのではないですかね。だから、外大の紛争をどうとらえるかということになれば、そうした文脈でしょうね。

菅 ありがとうございます。

箕面への移転

菅 先生のご研究の内容についても伺いたいとは思いますが、それ以外で、外大にとっては、やはり上八からこの箕面にやってきたというのは、非常に大きい出来事だと思います。この箕面への移転について、先生の思い出を教えてくださいませんか。

赤木 私も、そのころはまだ若かったから、基本的には、自分で移転に直接関与したというのはまったくないですね。しかし、個人的にも移転しなければならないということは思っていました。やはり施設としては貧素であって、運動場もきちんとしたものがないような大学では駄目だと、当時からそう思っていました。

一番いいのは、場所は動かず、建物をできれば高層にしたいなと思っていたけど、その時は法律で高層は禁止されているとわかりました。ですから、箕面へ移るということについては、私自身は移転委員会とかいう仕事にはほとんど関係がなかったのですが、それはやはり移らざるを得ないなと思っていましたね。

ただ、一番最初の候補地は今の阪大の吹田キャンパス辺りだったと思うけど、地主との交渉でうまくいかないという話を聞いていました。できれば本当は箕面よりもっといい土地を探したかったと思います。候補地はあったのだと思うんですが、北ではなく南の方でも良かったのではないかなと、今は思いますね。

というのも、私はずっと大阪府南部の泉佐野に住んでいましたから、いつも大阪における南北問題というのを考えさせられていたんです。とりわけ、万博以来北に社会資本が集中して、大阪の南北格差は拡大する一方でした。やっと関空（関西国際空港）ができてまともな道路ができたぐらいですからね。その差は、教育や文化にも言えます。それらの施設もやはり北に集中しており、南は貧困です。そのへんがちょっと心配でしたから、後で考えたら、南のもっと広々とした平らなところに移転すれば良かったかなという気はしましたけどね。でも、それは後の話で、当時は私も箕面移転は必要と思っていましたね。

それは、やはり上八の施設の貧困さに尽きると思います。早く脱出して、まともな研究や教育ができる環境の中にいたいという気持ちですね。

菅 大学としての施設は、移転して格段に充実したと思うんですが、それまでは上八という、もう少し行けば上六の繁華街という所での大学と、この箕面の山奥での大学というのは、大学のあり方が、ずいぶん変わったのではないかと思うのですが。

赤木 全然違いましたね。それは、ここを選んだのが良かったかどうかという問題とつながってきますが。

当時は、日本全国同じように大学の郊外移転現象が起きたんだけど、それは紛争の影響ですね。結局、一般市民が大学というものを嫌がったわけでしょう。だから、移転案が発表されると、候補地で反対運動が起きていたわけですね。それで、このような本当に境界の境界を選ばざるを得なかったのでしょうか。一段落して、少し冷静になってみると、おっしゃるとおりで、やはりできれば上六のようなところで、人間が生活している土地に大学もあるべきであるとわかってきたのですね。今日都心への回帰現象が生まれたのは自然であると言えます。このごろは、大学誘致には誰も反対しなくなりました。

日本人は、何でもそうかもしれないけど、きれいなところが好きですね、無菌室が。でも、無菌室で暮らすと結局人間は弱くなる。私はタイの田舎へ行って運河で泳いだりしたのですが、日本人はみんな嫌がります。汚いと。でも、泥水の運河で泳いだりしていたからこそ、やはり体に抵抗力ができて、結構、病気にならないで済んだと思うんですね。そのバランスは、大変難しいのですが、アトピーとか言った病気は無菌室環境にも原因があるのではないですか。大学も、無菌室の中では本来的な成長が難しいかもしれませんね。とりわけ外大のような大学は。

新しい学問（外大学）への挑戦

赤木 移転の際に、私が思ったのは、そのころから私もだんだん外大に馴染んできていたこともあるのですが、ここへ来たら新しい学問をやらなければいけないということです。だけど、移転の現実（ハード）の移転に追われ、内容（ソフト）の充実ができなかった。だから、移転が落ち着き始めてから、ちょっと教育や研究の在り方を改革しなければいけないなという気持ちになりました。

ここへ来たの（移転）はいつだったかな。

菅 1979年です。

赤木 そうですね、だいたいそのころですよ。正確に言うと、それ以前だと思うのですが、紛争直後から、どうしても改革しなければならないと考えていたことがありました。たぶん、1974年だったと思うんです。まだ外大が上八にあったころで、昭和何年になるかな。

進藤 昭和49年ですね。

赤木 昭和49年。そのころから、私が外大で第一に駄目だと思っていたこと—みんなそのころは同じように感じておられたと思うけど—、外大の語科の壁を越えなければいけないという考え方を私は持ちだしたんです。ちょうど万博（日本万国博覧会）が終わって（1970年）、大阪が静かになった時でもありましたね。

その1974年ごろだと、例えば、タイ語学科とビルマ語学科みたいな隣人語学科の間でも、先生が教授会ぐらいでしかあいさつを交わさないような状態でした。それではいけないと思ってね。3人から4人の所属教官グループのみで活動していても、大きな展望は開けないと思っていたのです。世界がグローバル化の方向に進もうとしていた時に、蛸壺を死守するような方向はおかしいと考えていたのです。

それで、外大の歴史の中にぜひとも残していただきたいと思うのですが、1974年の、たぶん5月だったと思うのですが、「アジア研究懇話会」というグループを結成したのです。だいたい韓国、朝鮮、中国から中近東までの地域を研究対象としている先生方に呼びかけて、緩やかな研究連合グループをつくらうという試みでした。その「アジア研究懇話会」の発足は、外大の発足以来の語学科体制を崩して、新しい何かを展望しなければいけないという考えに沿ったものでした。

私を含めて、中心になってもらったのは、インド語、パキスタン語だったかな、ウルドゥー語だったかな、加賀谷（寛）先生。それともう一人、名前が思い出せないのですが……。歴史の先生、誰だったかな。

進藤 桑島（昭）先生では。

赤木 そう、桑島先生ですよ。それから、パキスタンをやっていた、もう1人先生がいたね。高知県出身の……。浜口（恒夫）先生。それに、私と同年代で日ごろからよく話をしていた中国語の西村（成雄）先生とか。

つまり、今から考えると、言語そのものを専門としておられない先生がほとんどでした。その背景には、紛争の中で生まれたのですが、ドイツ語もそうだったと思うけど、言語や文学ではない分野をもやりましょうということで、言語と文学を一つのコースとして、他に文化コースを立てようという試みがありました。

そこには、それまで外大ではあまり取り上げてこなかった当該地域の社会や政治、さらには経済などを教育研究の対象とする動きを指摘することができます。

紛争後では、そういう配置をどこの語学科でもやるようになってきたんですね。だから、言語そのものをやらない人たちの連帯みたいなもので、アジアを柱にしたような研究会が出来上がったのだと思います。それが、私としては、語学科の壁を壊さないといけないと思った一つの最初の大きな具体的な行動でした。この研究会では、結構みんな一緒になっていろいろなことを考え実行しましたね。

その後、私のメモでは、「アジア研究懇話会」は、1978年に「アジア研究会」になり、さらに1996年には「アジア太平洋研究会」と、だんだん大きくなっていきました。外大以外の研究者も参加するほどまで成長しました。それで、この研究会では研究誌（『アジア学論叢』）を刊行してきました。創刊号は1991年でしたが、この刊行はやはり大きかったですね。様々な大学や研究機関でも取り上げられ、我々の存在が認められていきましたから。

この創刊号に「創刊に寄せて」と題して私が序を書いているのですが、大阪外大の在り方に関して触れているのです。それは今もあまり考えといたら変わらないと思うんですが、「大阪外国語大学の独自性を主張するアジア研究を求められるとすれば、<ことば>を十分に生かし各社会の内在論理を発掘し普遍へつき合わせることである」と書いているんです。これは、1991年のことです。

それ以前になりますが、1982年に、このグループはすでに『現代アジア社会の研究』（大阪外国語大学アジア研究会）を出版しています。今日は実物を持参しました。1974年にそういう集まりをつくって、8年後に、研究成果を出版しているのです。当時、これは外大の中では画期的な出版物でした。言語だけではなく様々な分野の論文を収めた本は、それまではほとんどなかったんです。もちろん、研究雑誌というのは、それまでもどこの語学科でも作っていたけど、語学科横断的なものはまずなかった。加えて、このシンプルではあるが緑色を使用した表紙レイアウトもほめられました。実は、これは私が自分で考えたんですが、自分でも上出来だったと思っています。この本を見てもらったら、語学科の壁を越えていろいろな人が執筆しているのがわかります。当時の代表は加賀谷（寛）先生だったですね。これは誰の論文ですかね。

進藤 相浦（杲）先生。中国語の。

赤木 中国語の相浦先生でしょう。それに、西村（成雄）先生ね。

進藤 ああ、西村先生は二つも投稿されていますね。で、あとは・・・。

赤木 小野田（求）さん。それと私でしょう。それから、インドネシア語の松尾（大）さんも。

進藤 あとは、ビルマ語の南田（みどり）先生。

赤木 これは白石（昌也）先生、ベトナム語ですね。これは、誰。

進藤 大野（徹）先生でしょう。

赤木 それから、桑島（昭）先生と浜口（恒夫）先生。これは？

進藤 岡崎（正孝）先生。

赤木 それに、富田（健次）先生も。これが出来上がったときは、本当にうれしかったのをよく覚えています。しかも、ちょっとすっきりした本で、それまでの外大内の出版物とはちがった雰囲気を持った本でした。これは当時、特定研究（1981年度特定研究）か何かで、外大の内部資金をいただいて、みんなに執筆してもらったのです。新しい外大の風を感じますね。

だから、このアジア研究会がそういうかたちでだんだん大きく成長していったというのが、やはり外大改革という意味では結構大きかったなと思っていますね。それは、先ほど言ったように、私にとっては、語学科を越えているところでの皆さんとの研究とか教育とか、そういうものにつながって行って、学内コミュニケーションがむちゃくちゃ良くなったんですね。

それで、この類の出版は全部で3部出版しました。3部作ですね。毎年1冊ぐらい出しています（『現代アジアにおける地域と民衆』1983年、『現代アジアにおける地域政治の諸相』1984年）。ですから、この活動が大きな影響を持っていたと私は思いますね。アジア研究懇話会、アジア研究会、さらに後にアジア太平洋研究会というふうに発展し、結局は、アメリカ、イギリス、フランスなどの研究をやっている教官や他大学や社会人の方も参加するようになり、本当ににぎやかな研究会になりました。

この時、僕は何歳だったか忘れたけど、タイから帰ってきて、ちょうど10年ぐらいの時ではないですかね。外大へ入ってからね。そうだと思います。

進藤 先生、上八から箕面に移転するというお話をいろいろな先生方にお聞きすると、どうしても、おんぼろからきれいなところになったとか、不便なところになったという話を中心なんですけど、今の先生のお話からは、外大の若手の先生方の中で、学問や研究に対するいろいろな新しい考えがあって、それが、ここへの移転と、ちょうど時代的にリンクしていたという印象を受けます。

赤木 私が覚えているのは、そのころ助手から講師になったころだったと思いま

すが、若手教官だけの会議をよくやりました。それが若い力だったのでしょかね。古い人は、校舎がきれいになったことしか言われなかったけど、私たちは、やはり語学科の壁を破らなければいけないし、とにかく新しいものを何か始めなければならぬと駄目だと考えていたわけで、進藤先生がおっしゃったとおりですよ。

ただ、今はだいぶ変わりましたが、その当時、やはり語学科体制というのは、3人か4人の教官がいて、ボスの先生が牛耳るという状態でしたから。それは視野が狭く、研究や教育にとっていい環境ではなかったですね。大変窮屈な組織であったといえますね。そんな状況が望ましいことであるとは、古い人でも考えてはいらっしやらなかったのではと思いますかね。

菅 ええ。

赤木 だから、やはり研究会を組織してよかったですね。それに、これも外大では初めてではないかと思うけど、このグループを基盤に科研(科学研究費補助金)をもらったので資金も豊富になり、研究会を各地で開催したり、外部講師を呼んでくることもやりました。今思えば、よくやったと思いますが、外大生活の中でも自分にとっては一番大きいものであったと言えますね。

つまり、進藤先生が今おっしゃったようなことを、新しいところへの移転後は何か始めなければいけないと外大人の多くが考えていたということですね。それで、取りあえず語学科の壁を破って、アジアだけでもいいから何かやろうというので、こういうことになったんだと思います。そして広範囲の先生方が参加してくださったんですね。新しい考えを持っておられる先生方が。

大学改革への取り組み－2 大学科への再編－

赤木 実際に、大学全体の改革が動き始めたのはいつごろからでしたかね。1990年代だったと思うけど。

『70年史』(1992年出版)の第5章に私の考えを書いたことは、先にも話した通りです。第4章で終わったら過去だけなんです。将来を展望しなければ、外大の発展がないと考えたのです。編集委員だった上に、たしか改革委員会にも関係していたので、そのころの学内の議論を自分なりにまとめたのが第5章です。

そして、何度も申しますが、外大のような小さな単科大学でも、やはり学内のみんなが持っているエネルギーを、能力を結集したら、新しいものができるという考え方を持っていたので、その手始めとして語学科の壁は崩さなければいけな

いと考えたわけです。

とりわけ、私が属していたタイ語学科などは、いわゆる「小語学科」と呼ばれ、英語学科や中国語学科などのような「大語学科」とは異質の存在としてとらえていた節がありました。誤解を恐れずに言えば、つまり、外大の本流は「大語学科」にあり、「小語学科」は付属物のようなものであるとする考えです。この考えは、ある種の差別構造が学内にあることを示していました。語学科間の壁を崩すことは、その差別観を打破することにもつながるわけです。

学内のエネルギーを結集できる体制づくりという視点から、その次に、やはり考えなければいけなかったのは、これまた伝統的に存在してきた一般教育と専門教育の差別化でした。当時、一般教育の先生とお話していると、直接の教え子が生まれにくいということが一番つらいと言っておられたので、これはいけないと思った。それを何とか解決したいなと思ったんですね。

そのためには、一般教育の先生も専門課程で教育でき教え子を出せるようなシステムに変えなければいけないと思いました。それと、今さっき言ったように、私の中で一番重要な位置を占めていたのは語学科体制を崩さなければいけないという問題で、結局、学部改革へ向かうわけですよ。

そこで、私が主張したのは、外大の教育研究組織の編成原理の変更です。従来は全て言語別編成原理でできたわけですが、それをやめて地域別編成原理を採用するよう提案したのです。結局は、その提案が大語学科制として実現したのですがね。大変困難な作業でしたね。

あの時は、一番苦勞しました。委員会の中で大議論をしました。何回か喧嘩もしたかもしれないけど、とにかく必死でした。語学科制の廃止と、今言った一般教育課程の改革を同時にやろうというわけですから。学科編成原理を言語別編成から地域別編成に変えた上で、一般教育課程を廃止するという方向ですね。それは、外国語学部全体の大改革です。

学部改革にはいろいろな意味があるわけですが、外大の学問や教育に新しい分野を組み込まねばならないということもありました。カリキュラム改革ですね。そうした、諸々のことを考えて、出てきた案が地域文化学科と国際文化学科という2つの大学科構想でした。

当時、私が思ったのは、外大は紛争のころまでは良かった。しかし、「紛争」と「移転」という経験を生かし、変化する世界情勢をにらんだ改革を怠ってきたという反省がありました。たとえば、英語とか、そういう言語はどこの大学でも

やるようになってきた。外大でことさらやるようなことではなくなってきたわけです。やるとしても、もう一つ進んだ次元での英語教育でなければならぬわけです。つまりのところ、外大の存在理由をよくよく議論しなければならなかったわけです。やはり従来の伝統的な言語学習に新しい価値を付加しなければならないと考えたわけです。そうすると、外国学（地域研究）ではないかという方向に収束していったわけです。それは、もちろん言語はやらなければいけないけど、その言語を通じて当該地域の何か新しい内在的な論理、文化を発掘するというような方向ではどうかということですね。

それと、単科大学ではなく、複数学部を擁する大学にしたかったですね。最少でも、2学部にしたかったんですよ。だけど、当時、文部省からは駄目だといわれ、規模でいえば学部とほぼ同じの大語学科ではどうかという意見があり、それに飛びついたのです。地域の個別性を考究する「地域文化学科」と地域間を貫く普遍性を考究する「国際文化学科」という二つの大学科に編成替えしたわけです。その編成に沿った教育システムを整備するのが非常に難しかったけど、「専攻語」というカテゴリーを設けました。全学生がいずれかの「専攻語」を学び、それをツールとして地域文化または国際文化を考究するという構想です。地域文化学科が従来の外大の伝統を引いていると言えますが、国際文化学科は全く新しいものです。私としては、ちょっと無理をしたという思いもありましたが、改革はどこかで決断しなければできませんね。

外大の歴史の中では、当時の学部改革時が在り方について最も議論がなされた時代ではなかったかと思えます。私は、今になったら改革は正しかったと思っているのですが。というのは、当初は国際文化学科は試行でしたから少々心配しましたが、諸先生のご尽力のおかげで予想以上に発展しました。その証拠に、徐々に国際文化学科の方にいい学生が入学してくるようになったと聞いています。

進藤 入試では、国際文化学科の方が偏差値が高かったようですね。

赤木 改革当初は言われましたよ。こんな学科になんか誰も来ない、変なやつしか来ないと。私はそんなことはないという確信がありましたから、それほど心配していませんでしたが。いずれにしても、それまで一般教養の担当であった先生方が、予想通り、自分たちが専門科目を担当し、学生を養成することが可能になり、やっぱり元気になられたんですね。それこそ外大の発展であり、私はうれしかったですね。

今年、東京外大（東京外国語大学）は2学部（言語文化学部と国際社会学部）

編成にしたけど、外大の2大学科制に酷似していますね。当時、東京外大の幹部に2学科構想を話したら、「うちは絶対にそんなことしないですよ」と言っていました。

一同 ははは（笑）。

赤木 こうした改革の根底には、やはり言語をどう見るかという問題が関わっています。私は、単科大学のままではいずれ壁（限界）が来ると思っていました。

ところで、進藤先生、ドイツには、外大のような語学だけの大学はないでしょう。

進藤 そうですね。

赤木 当時少し調べてみたのですが、あったのは中国と朝鮮ぐらいです。これは日本のまねでしょう。インスティテュート（institute）とか、トレーニングセンターとかいった形で、大学に付属している語学訓練組織はもちろんあります。ところが、大学そのものが語学訓練所であるような形態はきわめて日本的で、果たして大学と呼べるのかと苦悶し、これまではともかくもこれからもそんなことをしていたら、いずれ駄目になると思った。できれば2学部にして、だんだん増やして中規模の大学にする展望を描きたかったんだけど・・・駄目だった。

以上のような状況が1990年前後の外大を包んでいたのです。正式にこの地域文化学科と国際文化学科が発足したのは、1993年でしたか。

菅 1993年、そうですね、平成5年です。

赤木 2大学科体制の中には、従来の外大が抱えてきた言語編成原理や一般教育課程が生み出す種の学内差別といった問題の解決策が含まれていたわけです。

そうした問題に外大人が真剣に取り組んだのです。繰り返しになりますが、本当に何回も委員会をやりまして、みんなの意見を出し合いましたからね。時には大声で喧嘩みたいなことにもなりました。でも、その後、皆さんと、それまではほとんど交流のなかった一般教育担当の先生方とも、むちゃくちゃ仲良くなりました。

そうそういい忘れましたが、一部と二部という差別構造も、基本的にはこうした改革の中で消えていきました。たしかにいわゆる外大の伝統が消失したとも言えますが、外大が抱え続けてきた内部矛盾を、とりあえず何とか解消し少し前進できたというのが私の思いです。

大学院博士課程の設置

赤木 その次に取り組んだのが、たぶん大学院改革です。そこには、学部は2大学科制に変更したわけですが、この新しい制度で入学した第1期生が4年生を終えた後の進学先が旧来の大学院（修士課程）というのは、まずいという考えがありました。しかも、時代が変わりつつあり、大学院博士課程がないと大学としては一般に認められないという通念が拡大してきているということが頭にありました。当時の池田（修）学長と相談し、何が何でも博士課程を持った大学院を設置することを決断しました。設置までは苦しい過程でしたが、1997年に言語社会研究科（区分制博士課程）として完成することができました。

この仕事は、ちょうど学生部長だった時ですね。実際、大変苦勞しました。というのは、それまで何回か、たぶん2回ぐらい大学院改革委員会で起草した案を文部省へ持っていったんですが、駄目だったんですよ。つまり、よほど斬新な案でないといけないと考えました。それで私が考えたのが、学部改革の時に採用した「普遍と個別」という原理の発展形を大学院にも適用し、大学全体に一貫性を持たせるという考え方でした。加えて、外大らしい概念として「言語社会」という考え方を研究対象として考え出しました。当時一橋大学がこの「言語社会」という概念を実際に使用していたのですが、きわめて社会学的なものでした。私たちは、国境などの線で区切られた社会ではなく、ある一つの言語が構成単位となっている社会を措定し、それを「言語社会」と呼ぶことにしたのです。そして、この地球上の多くの「言語社会」を対象とし「普遍と個別」がぶつかり合うようなところを研究しますよという考え方で出したところ、それはいいなということで設置が認められた。

ただ、条件としては、修士課程の学生定員を100%埋めなければいけないと言われたんです。これには困りましたね。修士は、ばかどかい定員でしたから。

進藤 そうですね。八十何名でしたね。

赤木 そうそう。それで言われた条件に、最終的に2人くらい欠けたのかな。これはもう駄目だと思いました。実際、事務局サイドが確認した文部省からのシグナルでは博士課程設置は難しいということでしたから。

ただ、今日は、このインタビューはアーカイブだから話しておかねばいけないと思いますが、学長の池田（修）先生が「赤木君、何とかならんかな」とおっしゃったから、1996年3月ごろだったと思いますが、文部省に知り合いがおりましたから、すぐに東京へ飛んで行ったんです。それで、なぜ2人か3人ぐらい欠

けたらもう駄目なのか、何とかならないかといった話を率直にし、その時はそれで帰ってきたんです。希望も消えたと思い込んでいたころ、4月になってからだったかな、文部省から呼び出しが来たのです。みんな、これはもう最後の駄目だというお達しかなと思いつつ、委員会の名前は忘れましたが、出席しました。すると、その場で、「いいアイデアや、いい構想や。頑張ってください」と。うれしかったですね。

設置審（大学設置審査会）や文部省内部でどのような経過があったのか分からないのですが、とにかく設置が決定したのです。やっと、外大が一人前の大学として認められたのですから、皆で喜びあいました。もう一つだけ申し上げておかなければならぬとしたら、東京外大に先行する形で博士課程が設置されていたことも、大きな後押しとなったことです。日本に二つしかない外国語大学に、ある種の平等性をという考えが働いたのではないかと、少しあとから思うようになりました。もちろん、それは事実かどうかはわかりませんが、その意味では、東京外大にも感謝しなければなりませんね。何はともあれ、何とか外大に区分制博士課程大学院ができたわけです。外大生活の中で、私にとっても、一番うれしいことでした。これで、まだ外大は発展できると思いました。もし私が何か少しでも外大に貢献したとすれば、この大学院改革しかありませんね。

それで、少し元へ戻ると、大学院設置には、ご存じのように非常に厳しい教官の資格審査があります。これは、どこの大学でも同じだけど、外大の中にもやはり大学院担当教官とそうではない教官という分けをつくることになります。教官審査の準備が、やはり非常にしんどかったですね。私としてはそんな事態は避けたかったけれども、これはしょうがないわけで、申請書類の作成を行ったわけです。そういう意味では、一部の先生には本当に申し訳ないことをしたかもしれませんが、外大全体のためにはどうしても必要であったということでもあります。

それで、今でもすごいことだと思いますが、資格審査の可否通知が口頭なんです。文書ではないんですね。口頭で聞いたのをメモし、再度口頭で再確認するという方式でした。文部省で聞いた内容を、すぐに外大へ電話してもらったのを思い出しますね。

菅 ああ、そうなんですか。

赤木 それで、当時庶務課に宮城（雄二）さんという事務官がいましたが、この大学院設置の事務方の仕事は彼がリーダーとしてほとんどやってくれました。膨大な書類の作成はもちろんですが、その書類を当時は風呂敷に包んで持っていっ

たんですよ。当時の文部省は、郵送や宅急便は受け付けなかった。本当に官僚主義がまだ生きていたというのでしょね。

菅 ほお。

赤木 それで、教員審査の可否を、私は宮城君から電話で聞きながら、外大の事務室でメモしていきました。ほとんど合格でほっとしたのを、今でも覚えています。不合格の科目については、すぐに新しい教官を探して再度申請しなければなりません。業界用語では「差し替え」といいますが、これまた大変な作業でした。

進藤 なるほど、なるほど。

赤木 とにもかくにも、教官審査もパスということで、これもうれしかったですね。構想が認められ、その構想を現実化した案もパスしたわけですね。文系の大学院を一大学で立ち上げた国立大学の最後ではないでしょうかね。あちこちの大学で大学院設置構想が出ていましたが、複数大学による連携大学院がほとんどでしたから。単科大学で、独立で立ち上げたのですから、万々歳ですよ。

僕は、学部段階では言語学習だけあればいいと思っているんです。その考えは外大時代から持っていました。今でもそう思っていますが。でも、単科大学では学部段階で言語をやっても、その後行くところがない。学んだ言語を生かし、大学院などで様々な専門分野に進んでいくことが望ましいと日々考えていました。そうすれば、世界で活躍できるような人材に成長すると。

先週、ベトナム専攻語の同窓会があり、出席したのですが、そこに外大でベトナム語を学び、その後、東京芸大に進み、今ではソプラノ歌手になった人がいました。そういうのが、私は理想だと思うのです。素晴らしいと思う。なぜかという、ソプラノなんていうのはヨーロッパの音楽だと思うけれども、彼女の場合ベトナム語を出ているから、ベトナム語の歌を非常にうまく編曲し、歌っているのです。それは、音楽界でもきわめて新しいことであり、注目されていることでした。他のだれにもできないわけですから。まさに、外大がそこには生きていたと感じました。

ですから、現在のように、阪大の中の外国語学部であれば、言語を勉強した後、医学の分野でも行けるはずですよ。極端に言ったら、学部は外国語学部を出て、大学院から医学部へ行っても、おそらくできる人は、そこらにはいない医者になれると思うのです。ベトナム語のできるお医者さんというのは、社会的におおきな価値があるのではないのでしょうか。

しかも、大学院が設置された後、研究費が増えましたね。学部改革の時に、文

部省は最初は教員の定員を増やしてやると言ったんだけど、それほど増えなかったんです。しかし、研究費だけは、大学院ができてから増えました。それも非常に良かったと思います。

そういうことで、学部改革と大学院改革で、大きく考えていた外大の改革はずいぶん進みました。構成員のエネルギーを結集するにはどうしたらいいかという私の考えからしても、きわめて良くなっていったといえます。

外大と留学生教育

赤木 全構成員のエネルギー結集という点で言えば、一番残念なのが、やはり留学生別科です。今は、日本語・・・。

菅 日本語日本文化教育センターですね。

赤木 今は、教育センターですか。そうですね。ここはもともと「留学生別科」と言われ、昭和 29 (1954) 年に設立され、長い歴史を持っていました。問題点は、大学全体の中うまく共存できる形ではなかったことです。つまりは外国語学部との間がじっくりいっていなかったのを、何とかしたかった。何度も申し上げているように、大学の持てる全エネルギーを結集できる形をベストと考えていた私にとって、センターのエネルギーも大学全体にきちんと取り入れたかったのです。しかし、往年の学部とセンター間の拗れを修復するのは大変難しかったですね。一生懸命努力したのですが、なかなかうまくいかなかった。

私の一番の考えは、学部の日本語、あそこへ一緒に組み入れて、それで留学生に教育もするし、日本人学生の教育もみんなで一緒にやるという体制をつくりたかった。残念でしたが、これがなかなかうまくいかなかった。阪大になってからのほうがよくなったのではないでしょうかね。

進藤 そうですね。

赤木 そうですね。

進藤 はい。

赤木 本当に、センター問題は最後まで解決できなかった。日本語関係の人とか、留学生日本語教育センターの人とは何回もお話をしたんだけど、だめでした。私としては心残りだった。

事務官と教官の意識改革

赤木 それから、もう一つだけ、強いて言うと、事務官と教員の間意識の改革

を本当はやりたかった。私が入ったころの教授会なんていうのは、事務官の発言をまったく許さなかったからね。きちんと「どうぞ」と言われたい限り、事務官は発言できなかつたですね。しかも、事務官が少しでも意見を出すと、おまへは事務官のくせにというふうな発言をする先生もいたわけですよ。ただ今や、そんなことを言っていたら、大学運営はできませんよね。

例えば国際交流が一番大切なのは、先生でもないし事務官でもないようなコーディネーターというか、博物館や図書館でいうとキュレーターみたいな存在だとわかっていました。そうした人が絶対いるなと思って、いずれそうした体制づくりをやらなければいけないという考えがあったのですが、これもできませんでした。やはり、時間がなかったということでしょうかね。

今は、先ほどおっしゃったように、海外にでも研究連絡調整センターみたいな事務所を置くような時代ですから、阪大には事務官と教員の間みたいな役割を持った存在がすでに生まれていると思うんです。

私が短期ですがアメリカへ行かせてもらった際には、やはりそれを一番感じましたね。つまり、アメリカの大学には国際交流の専門家がいるわけだ。その人は何をやっているのかというと、教えてはいない。教官ではないのに、学生の国際交流の権限を持っている。それで、世界情勢を見て、世界中の大学の情報をきちんと掌握し、望ましい国際交流を推進している。どこの大学がどうときちんと調べている。そうした体制が、外大にはなかった。事務サイドでも、そういう人を育てなかった。そうした専門知識を持った人を育て、そこにきちんと権限を渡し、教官と協力しながら国際交流をやりたかったですね。本当は、国際交流だけではなく、教育や研究部門でもそういった人材が必要なんでしょうけど。やりたかったのですが、やはりまだまだ学内状況も熟しておらず、時間がなかったです。

ですから、私ができなかったという、その二つぐらいかな。でも、今は阪大でも、いろいろな方がいろいろな部門にいらっしゃるでしょう。教員と事務員に完全に分けられない人材が増えてきているはずですよ。だから、さまざまな機能や役割を持った組織を立ち上げることができますね。たしか、地域と一緒にって問題を考える何とかセンターというのができているのではないですか。何だったかな。津田（守）さんあたりが一生懸命やっていたような。

進藤 グローコル（グローバルコラボレーションセンター）ですね。

赤木 グローコル？。ああいうのも、大学がなすべき一つの仕事だと思うのですよ。

学生部長として

赤木 新しい大学院発足がいつでしたか。

菅 1997年です。

赤木 そうでしょう。1993年に学部改革を行い、その4年後ですからね。

菅 はい。

赤木 だから、1990年代が一番頑張ったということになるのでしょうかね。学生部長をしたのは、1994年から3年間でしたか。実際、学生部長の職が回ってくるとは夢にも思いませんでしたね。これは言ってもいいのかな。結局、教授会では新学生部長が英語の正木（恒夫）先生に決まったんですが、先生が断られたんですね。「私は二部主事も何回もやっている。機会の平等という点から、ほかの先生がやってください」と。あの方はもう絶対引かない先生でしたから。それで、当時の執行部が大変困って、結局最後に私のところに回ってきた感じでしたね。本命がダメだったから、もう誰でもよかったんじゃないでしょうかね。

でも、先ほどから言ってきたように、またまさに進藤先生がおっしゃったように、紛争後も、かつ箕面への移転後も、なかなか変革しない外大を何とかしなければだめだという気持ちを持っていたので、若輩ではありましたが、引き受けることにしました。

申し上げたように、加えて、外大が持っている底力がうまく結集できていない体制があり、それを改革しなければと考えていましたので。もう一回、構成員みんなのエネルギーを全部結集できるようないい組織にしなくてはならないというのが一番にあったから、学部改革による語学科制の廃止、一般教育担当教官の専門教育担当への編成替え、一部と二部の廃止などに取り組んだわけです。それは、言い方を変えれば、外大の中に差別構造が存在し、それがエネルギーの結集を阻害していると考えていたからです。たまたま文部省の大綱化政策などとうまく運動したということもありましたが、大学院博士課程設置も含めて、若い教官の応援を受けて、それなりに改革を進めることができたのだと思います。

でも、センターと日本語専攻との一本化や教官と事務官の協力体制の構築といったさらなる外大エネルギーも引き出すような改革は、結局できませんでした。残念ですが。

進藤 私は、ちょうどここに赴任した時に、先生が学生部長をやっておられて、学生部長というのは本当に多忙なんだなというイメージを持っていたのですが。

赤木 そうですか（笑）。

進藤 今、あらためてお話を聞いてみますと、通常の学生部長の業務に加えて、大学院の改革設置であるとか、学部改革を軌道に乗せるといった仕事ですね。そのような複数の仕事が学生部長一点に集中していたのだと痛感しました。今あらためて記憶をたどっているのですが、入試や教務関係の通常の仕事に加えて例外的な仕事が多く加わり、学生部長というのは、相当激務だったのではないですか。

赤木 うん。あれは厳しい。学生部長に、ああいうふうには仕事が集中するのはやめなければいけないという思いはありましたね。外大は規模も小さいから、それでなんとかもってきたのだと思う。学長は、ほとんど具体的な仕事はしない存在でしたからね。あれは名誉職ですね。だから学生部長が、実質、すべてを取り仕切らなければいけない。時には、教官や学生の個人的なことにも対応しなくてはなりませんし、やはり大変でしたね。しかも授業も、一つか二つぐらい持っていたのではないですかね。私は、授業も教室へ出かける暇がなく、ほとんどここ（本部棟）でやっていました。

進藤 なるほど（笑）。

赤木 仕事に追われ時間がなく、まともな授業ができず、学生さんには迷惑をかけたと思いますよ。本当に大変でしたね。

今は数人の副学長とかいろいろな補佐体制ができていますね。副学長制度を取り入れたのは、少し後で、私が学長になってからだと思うけど、それでも大変でした。私が学長になった時は、学長は名誉職ではなくなり、法人化の前倒しといってもよく、実質的な経営者に変わりつつあった時期でした。精神的にもきつく、本当にしんどかったですね。無理をするなど言われたので、あまり無理はしなかったつもりでしたけど。

それまでは、大学はある意味放任主義で、「経営」といった考えはなかったと思います。とくに国立大学はですよ。それが、大学自身がすべての事柄を考慮し、責任を持って対処していく組織体（法人）に変化していく時期になりつつあったのです。

もう一つ、学生部長時代ではありませんでしたが、学長時に大変気になったことがありました。自殺する学生が多かった年があったんですよ。

進藤 ありましたね。

赤木 1年に3人ぐらい亡くなったのかな。

進藤 そうでしたね。

赤木 社会からも関心を持たれたことでした。私も心が痛みましたが、原因がわ

からないだけに的確な対応策も打ち出せなく、つらかったですね。

それともう一つしんどかったのは、学生部長時代に戻りますが、留学生センターでお金が盗まれた事件があった。

進藤 ありましたね。

赤木 覚えていますか。

進藤 はい。

赤木 あの時、たまたま学生部長で、管理不行き届きかなんかで始末書を書きました。しかも、夏のボーナス全部に匹敵する額の賠償金を支払いました。

進藤 相当な金額でしたね。

赤木 相当な金額……。家内に説明ができず、困りましたね。おそらく、関係者の方々は、大変だったと思いますよ。

進藤 そうでしたか。

赤木 もう、なぜこんなことをしなければならないのかと思ったけど、しょうがないですね。そのずっと前の紛争のころまでは学生課長も教官がやっていたんです。部長よりも課長のほうが、もっと大変だったかもしれません。それが、だんだん事務官担当に変わって、部長だけが教官担当だった。今は、部長も事務官ですかね。

進藤 はい、もう教員の担当ではないですね。

赤木 そうでしょうね。あんな職務をする先生はもういないでしょう。誰も引き受けないでしょうね。

進藤 そうですね。

赤木 ですから、そういう意味でも、1人の教官がほとんどすべてをおんぶしてきた体制だったと言えますよね。昔は組織が小さかったからやれたのだと思います。

でも、しんどかったです。精神的にですね。たとえば、夜でも電話が鳴ると、何かあったかなと思って、どうしてもドキッとしましたね。

進藤 なるほど。

赤木 だいたいそんなところかな。そうそう、学生部長時代のことで述べておかねばならないことが他に二つほどありますね。

一つは、「司馬遼太郎記念学術講演会」のことで。外大の誇りであり大先輩である作家司馬遼太郎さんが1996年に亡くなられた際、すぐに出身母校である外大として記念事業を行わねばならないと考えました。それで、池田学長と相談

し、とりあえず司馬さんの古巣である産経新聞社に伺い企画を提案し、外大との共催であるような形の記念事業をすることになりました。外大が企画したイベントであんなにも大勢の人を集めることができたのは、他にありません。司馬さんの偉大さを感じました。

もう一つは、大学院の設置に合わせて、院生のための研究（論文）発表の場を確保しなければならないと考え、たしか平成9（1997）年11月の発足だったと思うのですが、先生方の協力を得て「大阪外国語大学言語社会学会」の設立に尽力しました。そして、学会誌『EX ORIENTE』の発行などを行いました。多くの教員や院生に参加する研究活動の基盤の出発点をつくり上げてきたと思っています。

菅 ありがとうございました。

赤木 いいえ。

学長として

菅 先生が学長を務められたのは、平成11（1999）年3月から15（2003）年2月まででした。16年度からは法人化ということで、今度は法人化を控えた非常に大変な時期に学長をお務めにいられていまして、その間、全学教授会の廃止とか、大学運営会議の設置とか、全学委員会の整備とか、副学長制度も導入されています。

赤木 そうそう、いわゆる、移行期でしたね。従来の外大には存在しなかった仕組みをたくさん取り入れていく、いや取り入れさせられた時期でした。

菅 中期目標・中期計画も。

赤木 そうです。戦後の国立大学が大きく変更していくスタート地点でしたね。先にも述べましたが、経営という観点の導入でしたね。

菅 そろそろという時期ですし、大学院棟（総合研究棟）ができたというのが、先生が学長のころの大きな出来事ではないかと思うのですが。

赤木 そうですね。それも、学生部長時代の大学院設置の仕事の一部といえ一部なんですね。院生が急激に増加したこともあり、彼らの研究環境を整えねばならないということで、文部省に交渉し実現しました。それで、学長に就任したのは、学生部長を辞めて1年ぐらいてしてからでしたかね。

菅 そうですね。1年と少し。

赤木 2年まではいかない？。

菅 2年弱ぐらいです。

赤木 そのころは、学生部長を辞めて、ほっとして解放気分浸っていた時です。その年はどこかへ行かせてもらったのではないかな。アメリカに行ったのかな。ちょっと忘れましたが、ほっとして、完ペキではないが学部改革もできたし、大学院には博士課程も設置できたし、少し新しい外大に脱皮できたなーと、自分でも思っていたのですが・・・。

またまた、学長という大役が約2年後ぐらいに回ってきました。

それで、今おっしゃったように、その時、私はたぶん54歳か55歳なんですよ。違いますかね。学長になったのは1999年でしょう。

進藤 1999年ですね。

赤木 生まれが1944年だから、何歳かな。正確には54歳かね。まだ、むちゃくちゃ若いわけですよ。いや、驚きでしたね。

ただ、その時に私が思ったのは、時代が変わるなと思ったんです。というのは、今までは、先ほど言ったように学長は名誉職だった。ところが、大学再編・変革という大きな流れがもう身近に迫っており、学長そのものが自ら働くというか、実務をきちんとこなさなければならない時代の到来というか、そのはしりだったのですね。

私が国立大学学長会議に出た時は、他の学長さんは皆さん60歳代後半か70歳以上の人ばかりでしたからね。だけど、しばらくしたら、若い方が少しずつ増えてきましたね。やはり、実務学長時代の端緒だったのは間違いありませんね。今考えたら、とくにそう思いますね。

正直言って、学長職を仰せつかった時は、困ったなどの思いが強かったですね。せっかく大学院までつくって一段落し、新しい外大で教育研究に邁進しようとしていたのに、国立大学をめぐる環境が法人化という嵐に曝されようとしていた時期で、内の問題もさることながら、外からの問題に対処しなければならなかったからです。

もちろん、学生部長時代に解決できなかった内の問題もありました。全学教授会の廃止に伴い、外国語学部と留学生日本語センターという二つの組織をどうマネージするかという問題です。副学長制度を取り入れて、それまでは学生部長に集中していた仕事の分散化はうまくいきましたが、小さな単科大学のなかの二つの組織の望ましい共存をどういうふうによく進めていくかというので、頭を痛めました。

この問題は、他の大学とはことなつた性格を備えていました。国際交流事業で、外大に來た外国からの留学生には日本語や日本文化の学習が必須なわけですが、この面倒を見るのは留学生日本語教育センターでした。ところが、交流事業で日本から当該国へ出ていくのはほとんどが外国語学部の学生や教官で、センターの関係者は少ないわけです。そこでは、必然的に、負担者と利益者が分離してしまうわけです。ここをどうも学部の教官は理解していませんでした。逆に、負担者であるセンターには不満が蓄積していました。それは当然のことでしょう。

これは、やはり大変良くないことなので、悩みました。大学全体にかかわることがらを決定をする際、両者の意見をうまく吸い上げるようなシステムができないかですね。それがないと、こちらで決めたことをこちらは決めないとかいったことが生じ、大学としての決定ができないわけです。例えば、寮の問題などは、学部だけで決めるわけにはいきません。留学生センターの意見も聞いて決めなければいけない。ところが、従来はほとんど学部が一人で全部決めてきていたわけです。これはまずいわけで、そこを是正できるいいシステムがあればと模索したわけですね。それで、できれば教育などでも相互交流を実現させたいというのが私の考え方でした。しかし、それはうまくいきませんでした。

今でも、センターのスタッフは20人ぐらいいらっしゃいますかね。

進藤 そうですね。

赤木 外大としては、センターは結構やっぱり大きい組織でしたね。だから、そういうのをうまく外大全体の中で組み込まなければならないと思っていたわけです。学部の教官に、学内にはそういう問題があるという意識が少なかったですね。もうひとつの組織としての大学院には、センターの先生も入ってもらいましたので、それはそれでうまくいきましたがね。

そんな悩みの中に、外から來たのは、第一次統合のうねりと言ったらいいのかな。大学再編成の動きでした。私は、先ほどから言っていたように、あまりにも蛸壺的な小さな大学、しかも単科大学ではいずれ限界がくるし、言語を習得した学生がいろいろな分野に行けるようにするのが理想だと思っていましたから、この動きを機に、そういう方向へ展開できないかなと考えたんです。

ただ私が学長時代は、単なる前兆であり、まだ具体的なプロセスに入っていませんでしたから、逆に表立った動きもできず大変でした。他の大学との関係をどう構築すべきか、どこを手をつなぐのがいいかなと考え始めたわけです。大学院が設置された時、すでに阪大と提携を結んでいましたので、どうしても阪大が第

一候補として浮かんできました。ご存知だと思いますが、新しい大学院では、阪大の先生に、特にコンピュータ分野の先生に講義を持っていただいていたし、外大と阪大の大学院の講義を互いに公開しどちらの学生も受講できるようにしていました。阪大の院生も何人かが外大に受講に来ていました。ちょうど両大学は連携の始まりのような動きの中にすでにあっただと思います。

ただ、新しい事態ですので、京都大学も、神戸大学も、連携候補として考えねばならず、悩みました。また、今だから言えますが、大阪教育大学からも連携統合の打診がありました。当時の近畿国立大学学長会議では、連携統合の話に多くの時間を割いた気がします。ただ、そうしたことは、あくまでも水面下のもう一つ水面下の話で、具体的な話ではできにくかったので、ほんとうに苦労しましたよ。

それで、水面下での動きとして、私が本当に一番話し合いをした相手は民博(国立民族学博物館)です。私は民博がいいと思ったんです。というのは、民博には、基本的に学生がいない。ただ、すでに連合大学院を持っていましたが。総合研究大学院大学の配下にありました。だけど、外大の学生は概して外国の言語や文化を学んでいるわけで、やはり外国の生活文化をも展示研究している民博はちょうどいいのではと思ったわけです。しかし、ここではあまり言えないこともまだありますが、やはり当時の民博の上層部の判断がもう一つ積極的ではなく、結局は話は進展しませんでした。いい感触もあっただのですが。

それで阪大とは、私の時には、どちらかという toward はあまり乗り気ではなかったですね。やはり総長先生の考えが理系重視に向いていました。阪大は主流がどちらかという理系で、文系は今でもお荷物的なのに、これ以上増加してもな一といったことをよく言っておられたから(笑)。

一同 ははは(笑)。

赤木 そういうことをあまり言うてはいけないと思いますが、事実そうだったと思いますね。だから、やはりそうした事情があり、私としては中途半端な形で終わらざるを得なかった。学長時代には、はっきりした結論が出せなかったと言えますね。

ただ、阪大の副学長とかいろいろな人に何回も会ったし、民博の幹部とかとも本当によく話し合いましたね。それで、できれば民博と思ったけど、文部省の方針ももう一つははっきりしなくて、中途半端に終わりました。ただ私としては、もう体力的にも限界、気力的にも限界に近づいていました。たぶんご存じないかもしれませんが、私はそのころ、原因不明の病気で病院通いをしていました。仕事

をして家に帰り、ワイシャツを脱ぐとき、両腕部分が真っ赤な血で染まっているという異常な症状が現れたのです。両手、両腕から出血するという困った症状でした。学長を止めるのが一番の治療と医者には言われたのですが、原因は今もってわかりません。

進藤 ほお。

赤木 それで、(腕や手を示し) ここが真っ青に染まり、ここらあたりから出血したのです。周囲はずいぶん心配してくれました。私も内心は、もうこれは駄目かなと、死ぬのかなと思ったぐらい。

その症状は、学長を辞めてから少しずつ良くなっていきました。でも、基本的になおるまでには、やはり8年から9年かかりましたね。原因はよく分からないのですが、たぶんストレスか何かでしょう。だから、あのままやっていたら、間違いなく倒れていたと思います。私の学長時代の4年間は、内外の問題に振り回された時代だったと思います。今考えれば、連携統合問題をもう少し突っ込んで行くべきであったかもしれません。でも、いい加減なところで妥協し、伝統のある外大を変な形にするのは、やはりいやだったのです。

それで私の考えは、阪大との統合はいいと思ったのですが、阪大と結婚するのであれば、阪大側にも大改革をしてもらわねばならないという強い気持ちがあったんです。だから、話し合いでは、阪大に条件としては結構厳しい条件を申しました。

阪大の全学部を一回チャラにしましょうと。うちもチャラにします。その上で、もう文学部とか経済学部とか何とかではなくて、世界の動きに沿った編成原理に従って、何とか類とか系でもいいんだけど、斬新な教育・研究組織を幾つかつくりませんかとか。そういうことをしない限り、やはり外大としてはOKは出せないといったスタンスだったのですが、なかなか理解してもらえなかった。

だけど、例えば、ドイツ文学は向こうにあるかな。

進藤 あります。

赤木 阪大のドイツ文学とか中国文学とかどうなのかと聞いたら、外大の方がいいんじゃないかと言う人も大勢いらっしゃったし、一般的な評価も、文系は外大の方がいいんじゃないのというのがあったから、そういうのもきちんと交渉の場で突きつけなければいけないなと思っていましたね。でも、結局はそこまでいかなかったですね。

進藤 はい。

赤木 非常に残念でしたが、もう限界だったのかもしれない。そんなところですね。だいたい、ちょっと体力的にもしんどかったかもしれない(笑)。でも、そのころは近畿の大学関係者とよく会いました。

全国的には、国立大学統合の一番最初はどこだったかな、山梨医科大学と山梨大学でしたか(2002年)。

進藤 ありましたね。

赤木 一番最初がね。

進藤 はい。

赤木 あの当時は、医科大がその地域の総合大学と統合する例がありましたね。

ところで、日本には国立の外国語大学というのは二つしかない。これが、もう文科省の中では一つのジャンルに入っているんです。文科省の大学わけのジャンルは四つあるのかな、五つだったかな。あるんですよ。帝大グループとか、何とか大学グループとか。

その分類でいったら、外大などは、見方によれば、ある種の国策大学ですよ。これは『70年史』にもきちんとかかれていますが、戦後専門学校から大学に昇格する時に、両大学の場合、本当に大学としてのステータスがあるかどうかの問題になったんです。言語をやるだけで、果たして大学かという疑問が突きつけられたのです。いろんな議論の末、何とか格上げみたいなかたちで大学になり、専門学校にならなかったわけです。

それで、私も考えたのですが、芸大とか防衛大とかというのも、やはり日本にとって必要ですね。国際的に見て、しっかりした国家であれば、当然備えておかねばならない教育研究機関ですよ。日本の国がしっかりしていくためには、やはり世界中の言語を学ぶ機関が整備されているのは必要だったわけでしょう。国策大学と私が呼ぶのは、そういう背景をしっかりと押さえておくことが重要だと思うからです。

同じ国立大の単科大学でも、小樽商科大とかとは少し背景が違うわけです。たぶん文部省の考えも、そうした国策大学を新しい時代にどのように改変するかは、大変難しい問題だったと思いますよ。そのへんも、ちょっとわたしも整理ができなかったですね。しかも、先ほど言ったように、外大にとって一番切っても切れない言語という問題が、いつも常につきまとうから、それを未来に向けてどう大学の中に組み込んでいくのがいいのか。さらには、大規模な総合大学にどうマッチさせるか、考えれば考えるほど難しかったですね。

進藤 そうでしょうね。

赤木 だから、ちょっとそこのあたりが、他の大学との話になると、整理がしきれないのですね。外大と他の大学のそれぞれの歴史と現状を踏まえて、統合するならするの理論的な説明を追求したのですが、なかなか・・・。

それと、私が強く意識したのは、統合が大阪という地域、関西という地域の活性化につながらなければならないという点です。阪大と統合するにしても、東京には絶対に負けない教育研究機関、あちらにはない学問を生み出さねば意味がないと考えていました。世界レベルの新構想のいい大学にしましょうということは阪大側にも何回も言ったわけです。教育大にも、もちろん民博にも言いましたね。

教育大というのは、理系から文系まで、結構教官の数が多いんですよ。お医者さんもいれば踊りの先生もいるしね。そういうのも魅力でした。何とか一緒になれないものか考えたこともありましたが、どう考えてもやっぱり無理でしたね。だから、統合を含む大学再編成の問題は、考えに考えたけど、結局は結論が出ないままに終わったということです。

後で分かったんですが、法人化の後の方が学長は断然やりやすくなりました。今でこそ、学長に大きな権限があるけど、私の時は何もないからね。今考えたら、本当に何の権限もなかったといえますね。人事権などほとんどすべては教授会、予算権は文部省でしたからね。思い出しても、学長をしている間は、お金の決済で押印したことがないですね。

本当に国立大学という組織は妙な組織でしたね。教育研究組織とはいえ、もう少しトップに権限があったらなーと、思いますね。今、学長に任命され、もう思う存分好きなようにやってくださいと言われてたら、全部の権限をもらえたら、立派な大学にする自信はあるのですがね（笑）。

一同 ははは（笑）。

赤木 ちょっと言い過ぎましたかね。すみません、どうも。

何かほかにありませかね。私として、大学再編成問題として話したいことはだいたいそんなところかな。

菅 よろしいですか。

進藤 はい。

総合大学の中の外国語学部

赤木 進藤先生、何かほかにありましたかね。ああ、阪大との統合後の外国語学部の在り方についての考えを聞きたいということでしたかね。

菅 はい、そうですね。

進藤 対外的なご活動についてもお願いいたします。

赤木 まず、阪大という総合大学の中の外国語学部については、この間『咲耶』（第23号、2012年、大阪外国語大学・大阪大学外国語学部同窓会）に「外大精神」という小文を掲載しましたので、それに譲りましょう。たしか、創立90周年記念号だったと思いますので、それを見ていただくといいですね。

進藤 はい。

赤木 その小文を執筆の際にも、やはりもう一回、歴史を振り返りながら外大の立ち位置を再度考えないといけないと思った。新しい総合大学の中では、「大学」ではなく「学部」ですから、そこのところをよくよく考えて欲しい。

外国語学部は、言語をきちんとやらねばなりません。徹底した言語教育を行うべきです。私は、教養としては、学部段階で外国語をやるのが一番いいと思っています。それは、その後の人生を豊かにするし、社会に役立つ人間になれます。だから、きちんと学部で言語教育をやって、その後自分で何かやりたいことがある人は専門の道に進むのがいいというわけです。阪大は総合大学ですから、どんな分野でも学べるはずですから、何でも勉強できるのですから、そういうシステムが一番いいと思いますね。そういうことを、小文では言いたかったわけで、読んでもらえれば分かると思います。

それからあとは、阪大の全体における外国語教育や地域研究などへの取り組みも、検討しなければなりませんね。外大の大変貴重な人材を阪大全体にあんなに大勢供給したわけですから、阪大全体が変わらなければおかしいですね。阪大の関係者は、そこのところをよくよく真剣に考えて欲しいですね。大きくなっただけで終わりではありません。

阪大になって、卒業生は出たのかな。

進藤 卒業生でいうとちょうど今年が2期目ですね。

赤木 2期目ぐらいですか。

進藤 はい。

赤木 10年ぐらいいたら、きちんともう一回見直して評価をやらなければいけないのではないかと思いますね。そして、英知を絞ってユニークな学部、さらに

は大学へと展開して欲しいですね。

日本タイ学会

進藤 学外のことは、いかがでしょう。

赤木 学外のことで、まず「日本タイ学会」のことをお話ししましょうか。しかし、1998年に日本タイ学会が創設されているのではないかな。その前身が1990年に組織された「タイセミナー」だったかな。つまり、タイセミナーというかたちで、日本全国のタイのこと（タイ学、タイ地域研究）をやっている学者や院生を中心にした小さな研究会をつくったのが出発点でした。

その会の特徴は、タイのことを勉強している者はそんなに大勢いるわけではないから（当時、約30名ぐらい）、1年に1回親睦も兼ねて1泊する研究会を皆でやるということでした。1990年にタイセミナーという組織をつくって、そういう活動を毎年続けていました。規模がだんだん大きくなってきたので、正式に学会にしようということで、1998年にそのセミナーをやめて、日本タイ学会を創設したわけです。今の会員はどれぐらいかな。250名ぐらいでしょうね。

進藤 そうですか。

赤木 結構増えてきましたね。私が外大に赴任したころには、日本全国でタイのことをやっているのは、ほぼ10人もいないぐらいでしたからね。だから、急速に増加したと言えますね。

それで日本タイ学会を1998年に発足させて、2009年に創立10周年という時、ちょうど私はその直前に会長をやっていたので、創立10周年記念で『タイ事典』（日本タイ学会創立10周年記念、日タイ修好120周年記念；日本タイ学会編、めこん、2009年）という本を日本タイ学会の名前で編集しました。これはきわめて評判がよく、編集長を務めた私としても、満足しています。ましてや、こんな時代が来るとは、タイ学を志したころには思いもよりませんでした。

私は、この学会については、神戸大学の北原（淳）先生と協力して進めてきました。北原先生とはタイでの農村調査を共同で行うなど、親しい研究者仲間なんです。先生と2人でタイセミナーを起こして、それを日本タイ学会へ発展させたわけです。タイセミナー時代と日本タイ学会とを合わせたら、20年ぐらいの歴史がありますね。うれしかったのは、この学会とタイの学会との交流も始まったことです。タイ研究に関して、日本人研究者とタイ人研究者が互いに意見を交換するというのは、きわめて有益です。今も、私は理事を務めています。学会事

務はもう若い世代にバトンタッチしました。それにしても、アジアと日本の関係はずいぶん変化したり、東南アジア研究者が増えましたね。

日本タイクラブ

赤木 それからもう一つ、私を中心となり設立した「日本タイクラブ」というのは、一般市民の交流団体で、基本的には学校や学問とはまったく関係ない。だけど、アジアとの関係を市民のレベルでも考えてもらわなければいけないと思い、これも 1990 年に発足させました。今日でいうところの、大学の社会貢献ということになるかもしれません。

例えば、タイから要人の方が来られたりしたときに、ちょっとお話をしてもらう場が必要だというものもあるし、それから、ご存じだと思いますが、2年ぐらい前のタイの洪水の時にはサプライチェーンということで話題になりましたが、タイには日系企業がむちゃくちゃあるわけです。工場もたくさんある。滞在者の数は数万人（私の推定では、約8万人）に及んでいます。日本タイクラブというのは、そういう方々で、タイから帰ってきて、もう一回タイのことを勉強したいというような一般市民の方を中心にした、タイ好き人間の集まりみたいなものですね。これを 1990 年につくって、今日までやってきて、この間も2月に公開フォーラムをやりましたが、やはり 200 人ぐらい参加者がおり、盛り上がりました。

進藤 ほお。

赤木 今年のフォーラムのタイトルは「タイのしきたり」というのでやったのですが、様々な分野の方々に出席していただきました。大阪のタイ領事館にも協賛していただいています。

日本タイ学会とか日本タイクラブの設立の大きな背景には、戦後のアジアと日本の関係が大きく関わっていると思います。日タイ関係は、ものすごく発展してきました。私が学生時代には、出かけるだけでも大変でしたが、今はもう学生さんとかも、日本にいるか、タイにいるか分からないぐらいの感覚で往来しています。一般の観光客でも、だいたいタイには日本人が月に 10 万人ぐらい行っています。

進藤 10 万ですか。

赤木 うん。年間 120 から 130 万人。

タイの場合には、なぜか好きになる日本人が多い。10 人行くと、9 人は絶対好きになるそうですね。つまり、リピーターになる。それと、先ほども申し上げま

したが、きわめて多数の企業が進出しています。私の推計では、在タイ日本人数は約8万人です。おそらく、今日、日本人が快適に生活できる外国としてはタイが第1番だと思います。それがあって、やはり日本との関係が非常に密になり、いろんな意味で意見交換や情報交換ができる場が必要になってきたのでしょう。

タイ語を学ぶ日本人も増えてきましたね。日本タイクラブでもタイ語講座を開いています。また、富田（竹二郎）先生が編纂された『タイ日大辞典』（日本タイクラブ、1997年）は世界でも最高のタイ語－外国語辞典と評価されていますが、これも日本タイクラブから出版しました。一般の出版社は利益が出ないだろうということで、手を出さなかったからです。

日本タイクラブが良かったのは、やはり市民レベルのボランティア活動になっていることでしょうね。記憶に残っている代表的な活動では、タイ米支援キャンペーンがあります。先生も覚えていらっしゃると思いますが、ちょっと前に日本で米が足りない時にタイ米が輸入されたことがあります。

進藤 ええ、ええ。

赤木 あの時、タイ米は臭いとかいうので捨てたりした人が出て、新聞で取り上げられました。その時、日本タイクラブではタイ米のおいしい料理の仕方のキャンペーンをやりましたよ。やはりタイ米に対する市民の理解が低い上に、アジアに対する偏見が入っていたのでしょうね。私たちはタイに対して失礼だと思いましたね。今思い出すと、よくやったなあと思います。こうした時には、大学人も社会的活動を行うべきですね。

進藤 あれは大きい騒ぎでしたね。

赤木 大きい騒ぎでしたね。研究者の集まりとしての日本タイ学会、一般市民の集まりとしての日本タイクラブ。この二つを立ち上げておいてよかったというのが実感です。

ところで、今年は、タイ国日本人会が100周年を迎えるんです。これは世界で一番古い日本人会です。やはりアジアの中で日本とタイというのは、相互の長い交流の歴史があるし、やはりどちらの国も植民地化されなかったし、アジアの中である種の持続性があった国同士であることは、大きいですね。他の東南アジアの国はほぼすべてが戦後の独立で、新しいですからね。

進藤 ええ。

赤木 だからそういう意味では、日本とタイが仲良くずっとやってきているというのは大きいと思いますね。アジアにおける2国間関係で、これほど友好関係が

長く続いているのはめずらしいですね。

進藤 なるほど。

タイ大使館に赴任

赤木 それと、外といえ、この経歴の中に出ていないのですが、私は 1985 年からバンコクの日本大使館に 2 年間いたんです。ポジションの正式な名称は、たしか「専門調査員」だったと思いますが。

進藤 はい。

赤木 それがやはり、私にとって大きかったですね。もちろん、その一昔前の 1975 年から 1977 年にかけてチュラーロンコーン大学とタムマサート大学で客員として教えたのもいい経験になりましたが、

進藤 大使館勤務は、昭和 60（1985）年から 62（1987）年ですね。

赤木 はい。これは大きかったです。というのは、基本的には自由に研究活動をしてよいということでしたので、ありがたかったですね。それでも、日本大使館に一室いただき、文化交流担当ないしは大使顧問みたいなことをやっていました。日本からもいろいろな人が来るわけですから。日本にいと絶対会えないような人が来ましたね。例えば、映画俳優、歌舞伎役者、政治家とか。やはりそういう人と会ったりして話を聞くと、外から外大を見たり大学を見ることができるようになるんですね。もちろん、現実の外交という仕事を垣間見ることもできました。各省から外交官として出向してきているキャリアの官僚とも親しくなりました。それは、一つの財産と呼べるものですね。その貴重な体験は、外大改革とかにも生きたと思っています。

それに、この大使館時代には、ほとんど毎日古本屋に通いました。現在の私のタイ語文献を中心とした「おさむちゃん文庫」の多くはこの時購入したものです。その後の研究や教育に生かすことができました。

日本学術振興会バンコク研究連絡センター長

進藤 先生は、1992 年に日本学術振興会（学振）のバンコク研究連絡センター長をお務めですが、これはどういうお仕事ですか。

赤木 これは、学振が海外との学術交流推進の一環としてバンコクにアジア拠点を設けており、その責任者ということで参りました。基本的にはタイと日本の学術交流の促進という仕事でした。また、日本からアジア各地に研究調査に来ら

れた方々への便宜供与というのもありました。私の時代は、まだ住居と事務所が分離しておらず、大変でした。でも、本当に諸大学の研究者が大勢立ち寄られました。また、タイ人研究者に対しての学振の論文博士（論博）の支援を行いましたね。今は、各大学が拠点を構える（阪大もそうですが）ようになりましたが、当時はまだまだそんなものはありませんでしたし、東南アジアの學術情報も少なかったので、日本からの問い合わせに答えるというような仕事でしたね。もちろん、タイの學術研究の総元締めであるNRCT（The National Research Council of Thailand：タイ国家學術調査委員会）と常に接触していました。

進藤 先生はずっとバンコクにおられたのですか。

赤木 バンコクにおりました。それは1年間だったと思いますがおりました。今は学振事務所は充実していますよ。私の時は本当に小さな事務所でした。筑波大の事務官が一人派遣されていて、その方と一緒にやりました。この勤務も、やはり勉強にはなりました。

私が非常にラッキーだったと思うのは、留学の後、タイの大学に2年教えに行き、それから大使館で2年勉強させてもらった。この大使館勤務時が一番時間が自由だった。それから、さっき述べた学振バンコク事務所と、何回かの長期滞在に恵まれました。もちろん、短期には、農村調査など何回も出かけました。そうしたタイでの滞在経験は私にとっては大変貴重なものとなりました。タイの方々を含めた諸外国の人々との交流、大学の方々との意見交換もでき、有益でした。とりわけ、外から外大を眺めることが可能で、良かったと思っています。個人の教育や研究にとっても、もちろん有益でした。

日本学生支援機構参与（東京国際交流館長）・東京外国語大学特任教授

赤木 あと、私は外大を辞めた時（2003年）は、まだ59歳の若さでした。それで65歳まで本当は外大にいたことはできたのですが（自分としても、教壇に戻りたかったのですが）、任期満了ということで辞めました。その後、当てもなく1年間はぶらっとしていました。どうなることかと心配していたのですが、2004年に学生支援機構（参与）で働くことになり、東京に出かけました。その年、旧の日本育英会と日本国際教育協会が一緒になって発足したばかりの新しい組織でした。本部事務所は市ヶ谷にありましたが、国際交流関係は駒場にも事務所があり、お台場にある東京国際交流館の館長も兼ねておりましたので、お台場、市ヶ谷、駒場を行き来しました。

進藤 はい。

赤木 お台場生活も楽しかったですね。行かれたことがあるかもしれませんが、お台場に国際学生寮（東京国際交流館）があるんです。世界で一番いい留学生宿舎だと思いますが、世界各国からの 800 人ぐらいの留学生が生活していました。

進藤 そうなんですか。

赤木 しかも、基本的には全員が院生でした。だから、ほとんど本国では、ある程度仕事をしている方などで、本当に民族の坩堝のような場でした。そこへ 4 年いたのかな。館長をやりながら、学生支援機構の国際交流部門の参与としての仕事をしました。

もうずっとそこにいればよかったのですが、最後は、東京外大から、特に AA 研（アジア・アフリカ言語文化研究所）の方で私の親友が、私も構想に少し関わったあるプロジェクトが動くということで、どうしても来てくれということで特任教授という形で東京外大へ参りました。日本学生支援機構勤務時代も含めて、関空と羽田の間を 6 年間飛行機で行き来していましたが、よく務まったと思っています。そして、2 年間で東京外大を辞し、外大時代を含めて約 40 年間の大学生活に、一応のピリオドを打ちました。

だから、最後は東京外大の特任教授ということでした。それにしても、大阪外大と東京外大の両方で勤務することになるとは、本当に人生は不思議なものです。

同窓会活動

進藤 先生、対外的な活動などを含めて、本当に多彩な面でご活躍されていたんですね。驚きです。

赤木 はい、意図したというより、自然にそのようになってしまいました。

進藤 対外的とも言えるし、学内のこととも言えることなのですが、先生はタイ語科・タイ語専攻の同窓会である「白象会」の顧問を務めておられるかと思います。そちらのお話も少しお願いできますか。

赤木 この記念誌（白象会 60 周年記念誌編集委員会編『白象の歩み 大阪外国語大学におけるタイ学 60 年』白象会 60 周年記念誌出版会、2010 年）を見られたのですね。

進藤 はい、そうです。

赤木 私は白象会の顧問をやっています。それで、白象会はもちろんバンコクに支部があります。この記念誌を作ったのは、3 年ぐらい前かな。これには、私の

ある種の執念に似たものがありました。とにかく外大がなくなるということもあり、タイ語学科ができてからの歩みを一回まとめておかなければいけないと思って。富田先生や吉川先生、卒業生、さらには支援いただいた関係者の皆様への感謝の念もあって、とにかく歴史を書き留めておかねばという強い気持ちからでした。でも、ありがたかったのは、やはり「白象会」の会員、つまり卒業生ですね、資金面での援助もいただいたし、とても大勢の方が寄稿してくださいました。あんなに部厚いものになるとは、予想していませんでした。この本を見てもらったら、外大のタイ語学科・タイ語専攻の歴史はほぼわかるはずです。一つの財産ですね。

一同 はい。

赤木 これは私が思ったのですが、同窓会活動というのはしんどいですし、本当に運営も難しい。ただ、白象会でこんな立派なものできたのは、ことのほかうれしかったですね。この記念誌を作ったあとから、東京の咲耶会の人から「先生、あんなもの、ようできたね」と言われました。私は、「ほかの語学科や専攻語でも作ったら、外大全体が理解できていいんじゃないですか」と答えたら、「いや、ほかのところはできませんよ」とおっしゃっていましたが。

結局、タイ語なんかは、やはり小さい組織だったからだと思います。しかも、バンコクに結構大勢滞在しています。バンコクへ行くと、こちらで会うよりも、本当に毎月ぐらい同窓会を開こうと思えば開ける。そういうところがあって、みなさんのコミュニケーションが非常によく取れていたというのが大きいでしょうね。また、富田先生が結構そういうことをきちんと指導されたこともあると思います。バンコクでは、同級生はもちろんのこと先輩と後輩の間のコミュニケーションがいいですからね。

阪大と一緒にってしまったということもあり、私は記念誌を出版しようと思いつき、白象会の会長に「こういうことをやりませんか」と言ったら、「やろう」とおっしゃった。それで結局、何がいるかということ、書く人がいるのと、資金がいるということになりますね。ちょっと普通の金額では無理だということで、きちんとした説明をつけて、卒業生に寄付をお願いしました。最初は集まるかなと思って心配しましたが、結構集まりましたね。それは、とてもうれしかったし、ありがたかった。おかげさまでいい本になって、みんな評判が良くて、この中に書いた人の中には、私は今まで活字になったものは書いたことがないという人がいて、喜んで神棚へ供えたとか(笑)。この本の出版記念会の時には、教師をして

いてよかったなとつくづく思いました。

しかも、原稿の執筆も卒業生に依頼したのですが、予想以上に集まりました。結局は、卒業生総数の約2割ぐらいの人が原稿を送って来てくれました。中には、出版後に、こんな立派な本だとわかっていたら、私も書きたかったと言ってくる人が大勢いました。おそらくは、どっちみちワープロによる簡易印刷みたいなのしかできないと皆思っていたからでしょうね。

進藤 なるほど、なるほど。こんな立派な本であるのなら、なぜ先に言ってくれなかったのかと（笑）。

赤木 こんな立派なのができるとは思わなかったということで、皆さんに非常に喜んでもらったわけです。一つの歴史として私が残したいと思ったのは、成功しましたね。

白象会というのは、なぜこんなに結束力があるのか、よく分かりませんが、今でも2カ月に1回は、会長以下10人ぐらいが集まっていますからね。それで何をすべきかということで、いろいろ話し合っていますよ。大きい総会は1年に1回ですがね。

外大全体の同窓会である「咲耶会」の運営はきわめて難しい問題ですね。いずれにしても、関係者は咲耶会の未来像を描く責任があるでしょう。白象会のような各専攻語の同窓会との関係の在り方も重要ですね。基本的には、やはり日常的なコミュニケーションがないとなかなか進みませんね。だから、白象会も、これから先は大変かなという気はしています。一般に、同窓会はどこでも困っていると聞いていますがね。

進藤 はい、そう聞いています。

赤木 ですから、同じことをまた申し上げますが、今度の記念誌の出版は、本当にありがたいことでした。一番多額の寄付をしていただいた方は、なんと30万円でした。

一同 ほお。

赤木 そんな人は、普通いないですよ。

進藤 すごいですね。

赤木 だから、これはすごいことだなと思った。おそらくは外大に相当の思い入れがあるという証拠ですよ。その方に寄稿を是非とお願いしたのですが、「いや、僕は書かないけど、お金を出します」とおっしゃったのです。私は、これは余計頑張らないといけなと思いました。

進藤 非常に立派なものになりましたね。

赤木 日本の代表的単科大学の一つの歴史であるから、定価を付け一般に販売したらという意見もありましたが、内々の出版にしました。原稿が集まらないとできないし、お金があってもできないですね。両方が揃わないと。やはり、小さな組織であったからできたのでしょうか。

ところで、今でも語学科や専攻語単位でどこかへ旅行するというのはあるんですか。

進藤 新入生がですか。

赤木 そうですね、新入生歓迎会を兼ねてですかね。

進藤 あれはもうなくなりました。

赤木 ああいうのがないとね。あれは制度として外大が始める前に、タイ語はずっとやっていました。

進藤 そうなんですか。

赤木 はい。それも2泊か3泊ぐらいの旅をやっていました。上級生と1年生と一緒に。旅を一緒にすると、ますます仲良くなりますしね。そういうことの影響が残っているのかもしれませんが。

進藤 確かに、大学で制度として行っていた時も、1年生だけ連れていくわけですが、上級生が勝手についてくるんですね、後ろから車で（笑）。

赤木 あれも、止めてしまったとしたら、残念ですね。

進藤 ええ。

赤木 そうしたことを率先してやられたのが、やはりタイ語学科の創設者である富田先生でしたね。やはり富田先生は偉かったのかなという気がします。だから、この本は富田先生へのお礼のための本みたいなのところもあります。

一同 そうですか。

赤木 ところで、戦後というか、創設されてまだ歴史が浅い専攻語がありますね。どこでしたか。スワヒリ、それから・・・。

進藤 スウェーデンとか。

赤木 スウェーデン、それから。

進藤 ポルトガル。

赤木 ポルトガル、ベトナムね。そういったところは、まだまだ卒業生が少ないし、団結力も高いはずだから、同窓会はうまくいっているのではないのでしょうか。

大阪外国語大学のあゆみ

赤木 大学の外で大きな活動というと、学会、市民ボランティア運動、同窓会ぐらいかな。でも、やはり戦後の外大と一緒に歩いてきたことが一番の思い出ですね。学部改革と大学院改革に多くのエネルギーを割いたような気がします。その原点には、やはりアジア懇話会から始めた流れがあって、皆さんが団結し協力し合ったのが大きかったと思いますよ。

もちろん、私は、アジア系以外の教官とも、大勢の方と親しくしていただきました。英語やイタリア語やフランス語などに属している先生方に、言語だけを教育研究している外大のような大学は世界的には普通ではないですよとか、言語は手段であり、言語そのものを研究するのだったら言語学であり言語学習との仕切りががきちんと分からないと駄目だとか話し、よく議論しましたね。当初は赤木は変なことを言うと思った方がいましたが、次第にやはり言語だけやっていたのでは駄目だという方向になりましたね。その問題で外大というのはずっと悩み続けて、ここまで来たのですよね。

でも、いまでも、学部段階で外国語を教養として学ぶのはいいと思いますね。その上で、それを生かして何かきちんとしていくよう自分で模索していくのが一番でしょうね。

進藤 何か菅先生からありましたら。

菅 いえ、もう赤木先生から詳しくお話を伺って、外大の流れというのがよく分かったなと思います。

赤木 菅先生は来られてどれぐらいですか。

菅 7年目です。

赤木 ああ、そうですか。でも、こういう仕事ををやっておられるからよく分かっておられるのではないですか。7年というと。

菅 2006年の10月から来ています。

赤木 外大の出発となった大阪外国語学校の出発は、1911年だったかな。

進藤 1921年ですね。

赤木 1921年か。約80年の外大の歴史ですね。戦後新制の国立大学として再出発したわけですが、語学科体制が崩れるまでは、ほぼ同じような流れだったと思います。もちろん、大学紛争が改革の間接的契機となったことは否定できませんね。

進藤 ええ。

赤木 それから、外大にとって南から北へ（都心から郊外へ）の移転も、大きく見れば、いろんな影響をもたらしているのではないのでしょうか。ただ、移転当時は大学が一般の社会からあまりにも孤立した場所に位置すると活気を失うというようなことは考えなかったですね。今日では、多くの大学が失敗と気が付き、再び都心へ帰ろうとしているでしょう。

進藤 そうですね、はい。

赤木 確かに上八キャンパスは、近くに飲み屋もあり、暴力団の事務所があったり、パチンコ屋があったりで、そういうものがあったから良かったのではないかなという意見が多いものね。

進藤 ええ。

阪大生へのメッセージ

進藤 先生、最後に一つだけよろしいですか。

赤木 はい、はい。

進藤 先ほど『70年史』のお話が出た時に、過去のことだけ記録しては駄目なので、先生が5章を執筆されたというお話でした。私たちも過去の記録を残すということで、この仕事をしていますが、同時に今の学生や外国語学部にもメッセージをいただきたいと思っています。例えば学生が今日の先生のお話を聞いていたら、いろいろ勉強になることがあると思うのですが。

赤木 私は、やはり外国語学部の学生であれば、先ほど言ったように、取りあえず自分が選んだ外国語をきちんと、一生懸命やって欲しい。

そして、それは非常に素晴らしい財産で、言語というのは、人間の思考はもちろんのこと、生活や活動の全部に言語が強く作用するものであることをよくよく考えて欲しいですね。とにかく選んだ言語を一生懸命にやってもらいたい。そして、その上に立って、このグローバルな時代ですから、やはり自分が何者であるかを自覚して欲しい。つまりは、日本のことも少し勉強して欲しいと思っています。日本のことも勉強して、自分がどういう歴史の中の国に生まれて、どういう位置にあって、文化的にどういうポジションにあるかということをよく考えて、グローバルな目で見たとときに自分が何をやらたいのか、何をしたらいいのかということ、真剣に考慮していただきたい。

学部段階では、どこでもだれとでもコミュニケーションができるような人間になる基礎を磨いて欲しいと思います。語学ができてコミュニケーションができ

ない人がいますが、それは教養がないからです。他人に伝える自分の意見や知見をきちんと持った人間でないとだめです。内容を伴ったコミュニケーションができれば問題はありません。それは非常に素晴らしいことであり、いろいろな所で活躍できるのは間違いありません。ただ、望むべくは、もしできれば、大学院などで何か専門的なことを勉強して、より大きい人間になって欲しいと思います。

私は、最初に言いましたように、外大に入学当初はタイ語なんてどうでもいいとか、やってもしようがないと思っていましたし、学習に真剣に取り組んでいませんでした。ところが、ちょっと話が長くなりますが、大阪から岡山へ国鉄で帰る時、当時はまだ新幹線がないから、急行でしたかね。

進藤 ええ、ええ。

赤木 田舎に帰省する時のことなのですが、いつだったか忘れました。1年生の夏休みだったと思いますが、車中で車掌のアナウンスがありました。病人が1人出たと、「お医者さんはいらっしゃいませんか」というアナウンスがあったんです。しばらくしたら、2人か医者がいらっしゃったみたいで、「ありがとうございます」とのアナウンスがまたありました。

その時、ふと思ったのです。この電車の中で、タイ語を勉強している人はいるかなと。

進藤 ああ、なるほど。

赤木 いや、ちょっと、考え出すと、面白いものですね。結局は、タイ語が少しでもできる人はいないにちがいないと自分で判断しました。ということは、私には他のだれもができないことができる。なんと楽しいことではないかと考え始めました。

ちょうど、そのころは、学生の間ではパチンコや麻雀がはやっていたんです。

進藤 はい。

赤木 この電車の中にも麻雀をする人は大勢いるけど、一番になるのは難しい。でも、タイ語に関しては、私が一番かなと……。それで岡山駅に近づくころには、岡山県の中でも、ひょっとしたらタイ語のできる人はいないかもしれないと思った。だったらタイ語を徹底的にやり、日本でも一番になるのは不可能ではないな。これはやったら面白いと、その時に思ったんですよ。

進藤 なるほど。

赤木 それで、私はタイ語の学習に頑張ろうと決心しました。世の中で麻雀で一番になろうとしたら、それはそれは大変ですよ。

進藤 ははは (笑)。

赤木 そして、先にも申した通り、外大の4年間で幸運なことも重なり、タイ語の運用能力もそれなりに獲得し、タイについての知識も相当豊かになりました。そして、留学を経ることによって、やっと私も社会で活動できる専門性を養うことができたように思います。まさに、「初めに、言語ありき」の人生ですかね。それが役に立って、いろいろなことができたわけですから。

神様がばらばらの言語を人間に与えたから困ると、よく言われますが、これはばらばらだからやっていけるのだと思います。今は英語時代と言うけど、全世界が英語になったら、文学とか、そんなものはほとんど墮落してくると思います。やはり異なる言語があるから、異なる文学が生まれ、文学そのものが豊かになるのではないのでしょうか。人間の社会は多様性があるから楽しいし、発展するのだと思います。言語が一様という世界を想像できますか。つまらないでしょうね。英語そのものでも一様ではなく、シンガポールではシングリッシュが生まれ、シングリッシュ文化が咲いてきているのです。母語である日本語をきちんと修め、それ以外の言語を身に付けること、それは非常にいいことだと思います。人間を豊かにします。

ただ、私がこのごろよく思うのは、伝える手段(言語)は持っていても、伝える内容(コンテンツ)がないのは、悲劇ということです。それは、やはり自分で埋めていかなければいけない。そこが肝心ですね。その埋め方を、どういうふうにするかということ熟慮しなければならない。若い人を見ていて、そのことを、強く思いますね。

社会で広く活躍している人は、皆さんとっていいほど、外国語ができます。ましてや、今後のグローバル化のことを考えると、やっぱり一つぐらい外国語はものにしないとだめです。これは、もう間違いないです。ということで、学生さんには頑張って欲しいと思います。

[赤木攻名誉教授略歴]

- 1944年7月 岡山県に生まれる
- 1963年4月 大阪外国語大学タイ語学科入学
- 1967年3月 大阪外国語大学タイ語学科卒業
- 1967年6月 タイ国立チュラーロンコーン大学文学部特別学生
- 1968年4月 タイ国立チュラーロンコーン大学文学部非常勤講師（1969年3月まで）
- 1969年4月 大阪外国語大学助手
- 1973年3月 大阪外国語大学外国語学部講師
- 1978年1月 大阪外国語大学外国語学部助教授
- 1988年1月 大阪外国語大学外国語学部教授
- 1994年11月 大阪外国語大学学生部長（1997年10月まで）
- 1999年3月 大阪外国語大学長（2003年2月まで）
- 2003年3月 大阪外国語大学名誉教授
- 2004年4月 日本学生支援機構参与・東京国際交流館長（2008年3月まで）
- 2008年4月 東京外国語大学特任教授（2010年3月まで）
- 2008年10月 泉佐野市教育委員会委員長（～現在）
- 2012年4月 大阪観光大学特任教授（2013年3月まで）
- 2013年4月 大阪観光大学教授（副学長・国際交流学部学部長）（～現在）

大阪外国語大学名誉教授へのインタビュー実施録

年 月 日	氏 名	掲 載 誌
2008年9月10日	是永 駿	『大阪大学世界言語研究センター論集』第1号、 279-299頁
2009年10月28日	中岡 省治	『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号、 285-312頁
2009年11月5日		『大阪大学世界言語研究センター論集』第4号 167-188頁
2012年1月12日	池田 修	<i>EX ORIENTE</i> Vol. 20、157-196頁
2013年3月22日	赤木 攻	本誌

赤木攻名誉教授に聞く
—大阪外国語大学の思い出—
2014年2月28日発行

編著者 赤木攻・菅真城・進藤修一
発行者 大阪大学外国語学部
箕面市粟生間谷東8丁目1番1号
URL:<http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/>
印刷所 ヨシダ印刷株式会社
TEL 06-6305-7888